TOTO 通信

2016年 春号

Toward a Creative Architectural Scene

特集

つなぐ思考

―間仕切りのテクニック

Special Feature

Separate but Connected Space

なぐ思考

――間仕切りのテクニック

Case Study 1

Apartment-House

Kochi Kazuyasu

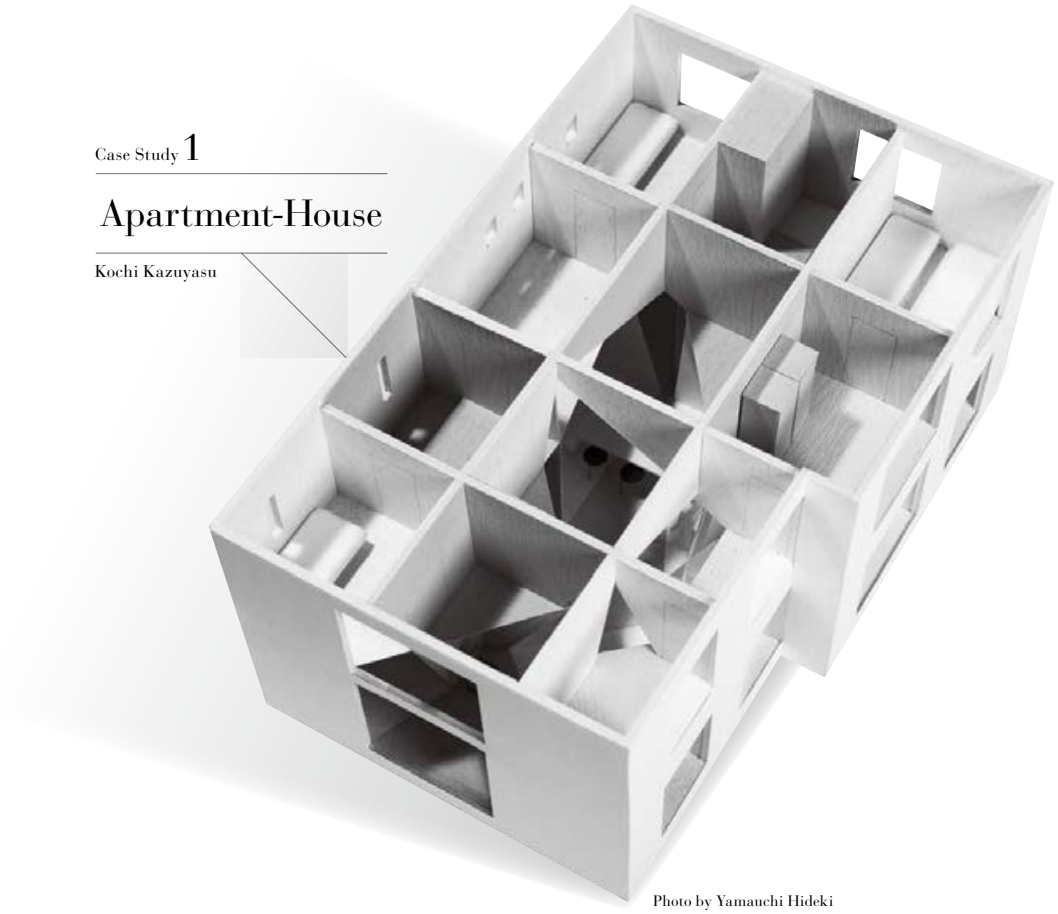


Photo by Yamauchi Hideki

建築空間をどう間仕切るのか。古代の寝殿造の頃も、がらんとした母屋と庇の空間に、御簾（みす）を垂らし、屏風（びょうぶ）や几帳（きちょう）を立て、間（ま）を仕切っていた。建築を考えるうえでの、普遍的な話題といっていいかもしれない。この数十年にも、2LDKや3LDKなどの、日本社会に浸透したnLDKの間取りを見直す動きがあった。

最近の建築家が手がけた住宅を見ていても、じつに多様な間仕切りのあり方がある。共通しているように見えるのは、仕切るというより、つなげようという意志。とはいっても、壁も何もないワンルームというわけではない。そこにはどのような思考があるのか、ひもといてみた。

河内一泰+藤井由理 4

設計／河内一泰 12

設計／藤井由理 20

設計／久野浩志 28

設計／佐々木勝敏 36

シリーズ

旅のバスルーム97　文・スケッチ／浦 一也　ホテル・ドゥ・コレクショナール（フランス・パリ） 44

現代住宅併走33　文／藤森照信 「新宿ホワイトハウス」　設計／磯崎 新 46

地域に生きる会社69　九州八重洲 52

新商品開発物語　『サザナ』プレミアムHGシリーズ、HSシリーズ 54

TOTOギャラリー・間で展覧会をします　三分一博志展 「風、水、太陽」 60

News File　TOTO News, Cera Trading News, Books 62

表紙写真／「アパートメント・ハウス」の吹抜け。
表紙撮影／傍島利浩　編集制作／伏見編集室
デザイン／岡本一宣デザイン事務所　印刷／ゼネラルアサヒ

特集

Special Feature

Separate
but
Connected
Space

Case Study 2

H Residence

Fujii Yuri

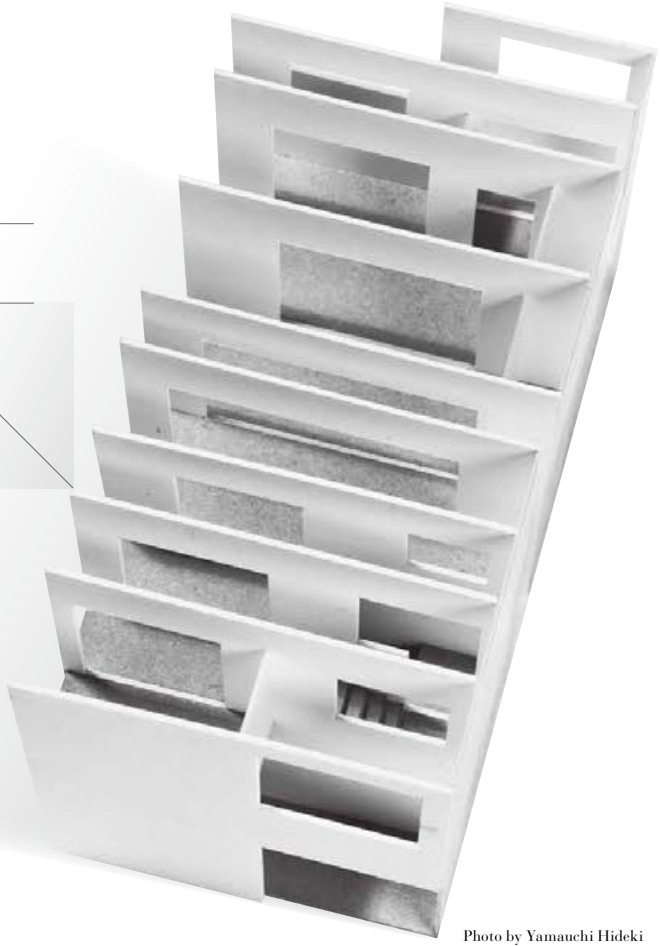


Photo by Yamauchi Hideki

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 510
Spring 2016

特集／つなぐ思考　──間仕切りのテクニック

インタビュー　仕切りながらも、つなげている

ケーススタディ1　元アパートの空間を、色鮮やかに間仕切る　作品／「アパートメント・ハウス」

ケーススタディ2　リズムよく並ぶ、間仕切りの列　作品／「H邸」

ケーススタディ3　U字の間仕切りが、上空をつなぐ　作品／「弟の家」

ケーススタディ4　1坪ごとの、見えない間仕切り　作品／「羽根北の家」

『TOTO通信』を
インターネットで
ご覧いただけます。 → www.toto.co.jp/tsushin/

「H邸」設計者

藤井由理

間仕切りは、空間を隔てるもの。
見える、見えない、という関係をコントロールするだけの
単純な存在とも思えるが、
河内一泰さんが設計した「アパートメント・ハウス」や、
藤井由理さんが設計した「H邸」の複雑な間仕切りを見ると、
どうやらそこには、もっといろいろな思考があるようだ。
おふたりに話を聞いた。

聞き手・まとめ／伏見 唯　撮影／山内秀鬼（特記を除く）

つなげている

仕切りながらも、

特集／つなぐ思考　――間仕切りのテクニック　インタビュー

「アパートメント・ハウス」設計者

≪　河内一泰

間仕切りは、場所と意味を生む

——今日は、住宅の「間仕切り」について考えたいと思います。おそらく時代を問わずに考えられてきた、普遍的な話題だと思いますが、今の建築家がどのように考えて間仕切りを設計しているのかをうかがいます。最初は原理的なところから話を始めたいのですが、そもそも住宅の間仕切りの役割はなんでしょうか。

河内一泰　やはり見えない場所をつくることが、間仕切りの重要な役割ですよね。あたりまえのことかもしれませんが、人は家族と同じ場所にいたいときもありますが、誰からも見られない場所でひとりで過ごしたいときもあります。僕には7歳の子どもがいますが、子どもを見ていると、親の目の届かないところで遊ぶのが、本当に好きですよ。僕自身もみんなと過ごしたいときと、ひとりになりたいときがあります。だから、間仕切りを設けない広々としたワンルームの空間もよくありますが、基本的には住宅の空間は仕切られるものだと思っています。

藤井由理　そうですね、同感です。また私は、一般的に間仕切りは空間にある種の「意味」を与える存在だとも思っています。今まで何もなかったところに間仕切りを入れることによって、あちら側とこちら側とで違いが生まれ、異なる「意味」が生まれます。その「意味」は、部屋の機能や主従関係だったりとさまざまですが、間仕切りが空間のなかに差異をつくるきっかけになるのだと思います。

——「間仕切り」といっても、壁だけではなく、建具などの開閉できるもの、屏風などの仮設的なものなど、いろいろとありますね。

河内　僕は「間仕切り」と聞くと、軽いものをイメージします。軽くて可動するパーティションのようなものです。オープンなワンルームをパーティションで仕切る住宅や、家族構成の変化に合わせて可動する間仕切りをしつらえている住宅は多いですよね。ただ、じつは僕は、自分の設計においては可動間仕切りはなるべく使わないようにしています。

——確かに「アパートメント・ハウス」(12〜19ページ)でも、各部屋の開き戸はありますが、可動の間仕切りといえるものはありませんね。

河内　動かない壁で、固有の空間をつくりたいからです。動かない壁があるから、そこに絵を飾ったり、本棚を置いたりして、空間を性格付けしていくことができると思うのです。また、建築は動かなくて、硬くて、重いものだという前提で考えていかないと、建築の形を考える意味が薄れていってしまう気もするんです。だから可動をよしとせず、できるだけ固定されているもので空間をつくるようにしています。今まで設計してきた住宅は、ほとんどそういう考えでつくっています。

——藤井さんはいかがでしょうか。「H邸」(20〜27ページ)では、建具を使って空間の開閉をコントロールしていますね。

藤井　ええ。私は引き戸や回転式の扉などを仕込んだりしますから、壁だけでなく可動の間仕切りも使

上下階で8住戸のアパートの壁をつなげて、戸建てに改修した住宅。
写真／傍島利浩

「アパートメント・ハウス」の内観

います。たとえば日本文化のなかで考えると、書院造では格上の人の居場所を一番奥に配置しますが、襖や段差などの間を仕切るしつらえによって、同じ空間のなかに地位の差を生み出しています。今では住宅内に格付けはないかもしれませんが、段差などのさまざまなしつらえによっても、空間は仕切られていくものだと考えています。

nLDKは、リセットされている

——日本の住宅は、個室の数（n）＋リビング（L）＋ダイニング（D）＋キッチン（K）で表現することが一般的には定着していますが、おふたりの住宅も含めて、建築家の住宅はnLDKで表現することが難しい場合が多い。「脱nLDK」といわれて久しいですが、nLDKについては、どう思われますか。

藤井　住宅史をみてみると、昔は大きな空間を襖でゆるく仕切っていましたが、大正時代の頃でしょうか、家族のなかでも個と公をはっきりと分ける意識が芽生えてきていますよね。個の空間がだんだんと必要になっていって、nLDKなどの個室をつくる日本の住宅のプロトタイプができていく歴史がありますが、家族のあり方が多様になってくると、そのプロトタイプも見直されていきます。個人的にも、公から個の空間を分けていくときに、はたして完全に部屋として囲い込んだ住宅が、本当に住みやすいのだろうか、と思います。人と人の関係を考えると、部屋を完全に囲い込むより少しオープンなものをつくっていきましょう、という考え方が、今ではかなり浸透していますよね。

——やはりnLDKとは異なる方向を目指しているということでしょうか。

藤井　一般的にはよく知られている考え方なので、nLDKの使い方に合わせて、平面図には便宜上、室名を付けています(27ページ)。ただ、ひとつの箱の空間に間仕切りを入れて区切って、公から個の空間を隔てるというよりは、個の空間があって、それをどういうふうにつないでいくのか、ということを考えています。矛盾しているようですが、つなぐことを考えた結果として、「間仕切り」を設けているんです。なので、隔てて「意味」を生む一般的な間仕切りとは本質的に異なるものを考えています。

「アパートメント・ハウス」の模型

軸組みの模型。改修にあたって、柱、梁、筋かいなどを付加し（オレンジ色の部分）、耐震補強をしている。

それぞれの場所の形態を探るより、場所同士の関係をデザインしたい。

Koichi Kazuyasu

河内　つなぐための間仕切りということですよね。「H邸」を見たときに、室名がしっかりと書かれているのに、部屋が間仕切りにまたがって配置されていたりして、壁が仕切るために使われていないところがある。逆説的な壁の使い方だと思いました。

――河内さんはいかがでしょうか。

河内　nLDKは浸透している考え方ですから、クライアントとの共通言語としても使いやすい言葉だと思っています。nLDKの考え方の背景にあるのは、設備や家具が場所の機能を決めているということです。たとえばベッドは大きいので、そう簡単には移動できるものではありませんから、寝室が固定化されていきます。またベタかもしれませんが、ソファとテレビのセットがあれば、そこが囲われていてもいなくても、そこはリビングでしょう。キッチンも配管などの設備があるから移動することはできない。要は、間仕切りの前に、機能を担保する大きな家具や設備が、住宅の中の場所を大きく決めていると思うのです。そうした場所があったうえで、物理的にどのように間仕切りを設けていくかは、建築の自由な裁量なのだと考えています。

僕は思うのですが、昔のnLDKの議論では、家族の関係性と建築の形を密接に考えていましたが、今の時代、建築が家族の関係性におよぼす影響は、もっと間接的なものではないかと思います。

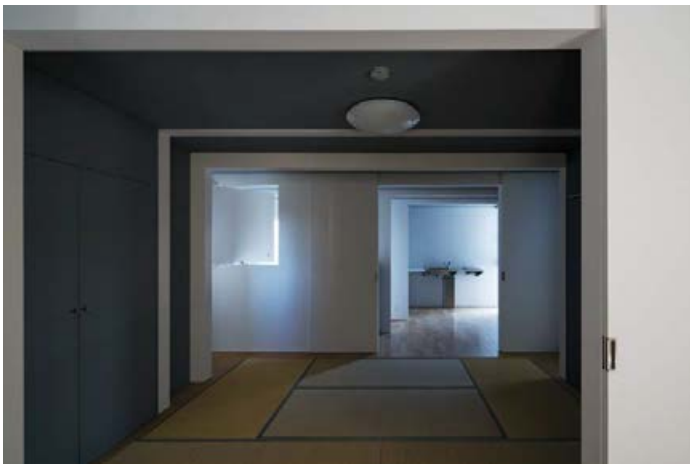
――かつては、住宅が家族をつくる、くらいの気運があったかもしれません。

河内　間仕切りというのは即物的なもので、壁があれば向こう側が見えない、壁が低いと立って見通すことができる、というくらいの物理的な状況です。そのなかで、家族がどのような関係性をつくるかは、住まい手がその時々で選択するものだと思います。

藤井　当時の時代背景だと、ある種のトップダウンで理想的な生活や家族の形が示され、その結果としてnLDKの形式が普及しました。ただ、今の時代に生きる私には、決まったあるべき家族のあり方に従って、住宅のモデルをつくっていきましょう、という考えはありません。それぞれの家族の状況に対して、住んでいる人が関係性や居場所を自由につくり出していけるような住宅設計をしているつもりです。その即物的なきっかけとして、間仕切りがある、ということでしょうか。

河内　そうかもしれないですね。社会全体で家族の関係性は変化しています。子どもと親との関係もフラットになりつつあります。このことが、住宅建築の形式を自由に選ぶことにつながっているように思います。若い世代が新しく住宅を建てるときには、自分たちのためだけの形をつくることもできるので、いろいろな個別解ができやすいのだと思います。仕切るべきときは個室化する、つなぐべきときはワンルーム化する、という2択ではなく、その中間もあります。nLDKを否定はしませんが、すでにリセットされています。

関係性を固定しないつなぎ方



壁が一方向に連なっている住宅。壁と空間のレイヤーが感じられる。
写真／藤塚光政

「H邸」の内観

——nLDKにせよ、ほかの形式にせよ、ひとつの家族像に関係性を固定しない、それぞれの家族にあった間仕切りのあり方が必要なのですね。

河内　リビングやダイニングなどの個別の機能は、家具や設備が決めてしまうとすると、個々の機能に対して形を探るより、機能同士、あるいは場所同士の関係をデザインするほうが、僕はおもしろいと思います。

——多くの住宅では廊下が部屋をつなぎますが、おふたりの住宅にはいわゆる廊下らしいスペースがありません。

河内　僕は廊下はほとんど使いません。廊下は部屋と部屋の動線を担保するものですが、廊下をつくると回路図のように、つながり方の図式が動線によって成立してしまいます。視覚的なつながりや、空間的なつながりより、動線的な関係を部屋のあいだにつくってしまうのが廊下だと思っています。外廊下の場合は、動線は外側で担保できますが、中廊下の場合には、部屋と部屋のあいだに廊下が入るので、廊下が間仕切りになり、関係性が固定してしまいます。僕にとっては、廊下は住宅を回路図にしてしまうので、空間によるつなぎ方を考えているときは、あまり選択しません。

藤井　じつは「H邸」では、廊下と呼んでいる部屋があります。河内さんが言うように、一般的には廊下は部屋に行くための機能であり、部屋と廊下とは空間のヒエラルキーとして主従の関係にあると思うのですが、ここでは部屋と廊下とを対等に設計しています。廊下という名称を付けていても、いわゆる部屋と部屋をつなぐ廊下ではなく、ほかの部屋と同様に、壁と壁のあいだに出てきた部分、というだけの場所でしかない、という考えです。

つなぐための間仕切り

——たとえば日本建築には、欄間や格子などの、空間を仕切りながらもつないでいるディテールや仕掛けがありますが、おふたりはどういう工夫をされていますか。

間仕切りは、
隣り合ったもののつながり方のデザイン。

Fujii Yuri

「H邸」の模型

壁の連なりを表現した模型。藤井さんは、過去に設計した住宅でも、この壁の列の模型を制作してきた。

河内　間仕切り壁で完全に仕切ってしまうと、奥が見えないからあたりまえですが、隣の空間との距離感がまったくわかりません。ただもし、半分見えたりすると、隣の空間との距離がわかる。壁が手前に見えて、次の空間があって、さらに奥も見える、というレイヤーのような風景が広がります。こういうつながりは、間仕切りのないオープンなワンルームでは、むしろできません。仕切る、仕切らないということで、近い、遠い、という距離の関係性を生み出したいと思っています。また、遠くのものから、近くのものまでが、一度に目に飛び込んでくると、風景の密度が上がると思っています。

藤井　「アパートメント・ハウス」の壁の小口（18ページ）では、あえて薄い板であるかのように見せていますが、どのような効果を期待しているのですか。

河内　2次元的な新しい奥行きをつくれないかと考えました。近代的な3次元グリッドの空間が生み出す奥行きとは、別のものに挑戦したかったのです。その手段として、壁の厚みを感じない線のように見せています。壁に厚みがあると距離感がわかりやすくなりますから。ジェームズ・タレルの作品のようなことです。間仕切りがあってこそできる、距離感の操作です。タレルの空間には勝てませんが。

――2次元的な風景をつくろうと思ったきっかけはありますか。

河内　過去に、2次元的な風景に魅せられたことがあります。京都の円通寺には、比叡山を借景にした有名な庭園がありますよね。座敷から外を見ると、手前の柱と奥の杉の木の太さが同じように見えたり、遠くの山と近くの生け垣のラインが同じように水平に伸びていたりと、遠近感のない平面的な風景が広がっています。これは比叡山までの地面があまり見えないことと関係していると思います。人間は空間を認識するとき、地面や床面が見えないと遠近感が湧きにくいのでしょうか。なかなか円通寺のようにはつくれないのですが、あの風景に影響されています。今回の「アパートメント・ハウス」では、色も使った2次元的な風景に挑戦しています。

――藤井さんは、間仕切りにどのような工夫をしていますか。

藤井　ある種のあいまいさが、空間に豊かさを与えると考えています。たとえば、壁の開口がズレながら連なっていると、はっきりしない、あいまいな構成になりますよね。そのあいまいなところを頭のなかで補完しようとする、たとえば見えていないところを想像するとか、そういうことが豊かな空間につながるのではないかと思っています。なんというか、感覚的な揺さぶりがあるとよいな、と。

河内　そうですね。あいまいさは、選択の自由も生むから、人のイマジネーションを広げますよね。

――「セリー（系、列）」という、壁を列状に並べることもテーマにしていますね。

藤井　列のように壁を連ね、単にその壁と壁のあいだが居場所となることで、機能や室などの既成概念にとらわれず、純粋に人の身体と空間とがかかわれるのではないか、と考えています。また人が動いていったときに、その壁の層のあいだを行き来することによって、人が空間をつないでいくような、人間が繰り返す行為によって、場所の関係性が決まっていくようなことをイメージしています。

Kochi Kazuyasu

そこまでしてでも、つないでいく

――おふたりとも、かなり複雑な間仕切りの操作に至っていますが、そこまですることの思想的な背景はありますか。

藤井　私は、人間の「分節」と「非分節」の行き来の感覚にすごく興味をもっています。私にとって「分節」と「非分節」とは、人間が何かに意味をつくるか、つくらないか、ということです。ややこしいのですが、たとえばパウル・クレーの絵画のようなこと。クレーは自分の造形原理の研究のなかで、あるスタディをしています。それはひとつの紙にいくつかの点を置いていき、点が増えていくと、どこかの段階で点が固まった形に見えてきて、たとえば十字のクロスとか、T字の形が出てくるようになる、というものです。単なる点の集合体のときは、意味がない、「分節」できる形ですが、点がひとつの形を成して、意味をもつようになると、それは「非分節」の形となる。点の集合ではなく、T字になる。このスタディは、彼の抽象絵画でも実践されていて、たくさんの線や色があるような絵なのですが、見る人が見ると、何かの形に見えたりするんです。それは「分節」と「非分節」の行き来のあるものだと思っていて、すごく楽しいと感じるんです。絵の鑑賞者が、絵に参加できるきっかけになっている。建築空間も、そういう人間の身体や感覚が参加できるようなものを目指しています。

河内　近代以降、空間が分割されて仕切られてきた時代が続いてきましたよね。ル・コルビュジエのドミノに始まり、積層された床が都市をつくるようになりました。仕切りながら、複製されていった。その床に穴をあけ、仕切りを崩していこうとする考え方は、レム・コールハースの「フランス国立図書館」のコンペ案（1989）や、ジャン・ヌーヴェルの「ギャラリー・ラファイエット」(96)、伊東豊雄さんの「せんだいメディアテーク」(2000)などの大きな建築では実践されてきました。ただ、住宅ではまだまだ。住宅は床だけではなく壁もあり、より高密度なグリッド（仕切り）があります。そこに穴をあけ、仕切りを崩していく時代だと思っています。日本の人口は、とっくに減少期に入っているんです。人口が順調に増えていた時期は、たくさんの人のために空間を分割していく必要がありました。その理由が、今はなくなっているのですから、その分割された空間を、今度はつないでいかないと。

河内一泰

Kochi Kazuyasu

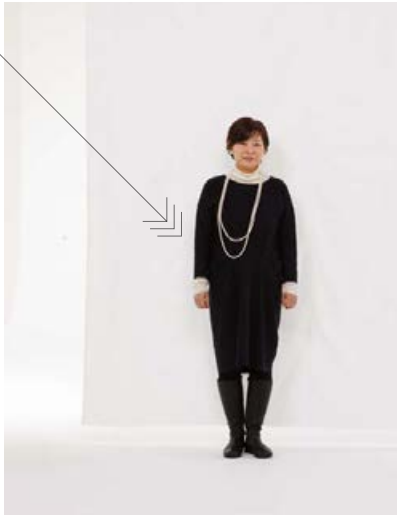
1973年千葉県生まれ。98年東京藝術大学建築学科卒業。2000年同大学大学院修士課程修了。00〜03年難波和彦+界工作舎。03年河内建築設計事務所設立。現在、芝浦工業大学、日本大学、東海大学、東京藝術大学非常勤講師。おもな作品＝「書家のアトリエ」(04)、「庭の家」(09)、「アミダハウス」(13)。

藤井由理

Fujii Yuri

1970年東京都生まれ。94年津田塾大学数学科卒業。97年早稲田大学理工学部建築学科卒業。99年同大学大学院修士課程修了。2000〜01年スタジオナスカ。01〜04年スタジオ・ダニエル・リベスキンド。04年〜藤井建築研究室。現在、早稲田大学理工学術院建築学科准教授。おもな作品＝「第5回ヒロシマ賞受賞記念ダニエル・リベスキンド展」(02)、「ロイヤルオンタリオ博物館」(04、ともにスタジオ・ダニエル・リベスキンドでの担当)、「新宮島邸」(12)。

Fujii Yuri



Special Feature

Separate but Connected Space

Case Study 1

特集／つなぐ思考
——間仕切りのテクニック
ケーススタディ1

作品

「アパートメント・ハウス」

設計

河内一泰

元アパートの空間を、色鮮やかに間仕切る

もともと8住戸あったアパートを、
戸建てに改修した住宅。
住戸のあいだの界壁を取り去り、
空間をつなげているが、
そのつなげ方が、きわめて複雑。
壁は斜め、色は鮮やか、まるで絵画のよう。
この間仕切りの意図は何か。

取材・文／大井隆弘　写真／傍島利浩

Kochi Kazuyasu

空間を仕切りながらも、全体がつながっている構成。また、3次元空間の住宅の中に、2次元の図形が見出せるように、壁のエッジを薄くし、色を塗り分けている。

近代住宅の間取りを説明する際に用いる3つの型がある。それは、各居室に中廊下から接続する「中廊下型」、居間など団欒室から接続する「居間中心型」、そして玄関ホールから接続する「ホール型」である。これは玄関から各居室までの動線に着目した型で、組み合わせれば驚くほど多くの住宅が説明できる。ところが、この説明を可能としているのは、中廊下や居間、ホールの独立性であり、各居室との境界があいまいになった途端に判断は難しくなる。ただ、そうした間取りには新しさへの期待もある。近代建築がコンクリート、鉄、ガラスといった新材料によって初めて実現したように、その住宅に何かしらの新規性が認められれば、期待はいっそう膨らむ。河内一泰さんが設計した「アパートメント・ハウス」は、そんな期待感のある住宅のひとつだ。

賃貸住宅の行く末

この住宅は、千葉県郊外の住宅地に立つ。作品名が示すとおり、もとはワンルーム8戸、木造2階建ての小さなアパートだった。昨今の賃貸経営は厳しさを増している。人口減少と供給過多を背景に空室率増加と経年による家賃低下は著しく、人口増加を続ける東京でさえ空室率は1・5割（約49万戸）、築20年で家賃は平均して30%ほど下落するという報告もある。1991年に建設されたこのアパートも、当初は近隣大学の学生などを借主として順調に経営していたが、近年では家賃を下げつつ、やっと2、3戸が稼働する状況だったという。どこにでもある普通のアパートだ。きっと同じような状況が全国にあふれているのだろう。

こうした背景から、近年ではリノベーションという用語が市場で躍り、おもにデザインの力を借りて苦境から抜け出そうとする試みが続いている。シェアハウスへの転向もそのひとつで、最近では民泊の議論も盛んだ。そうしたなか、「アパートメント・ハウス」は、賃貸経営をやめ、新築もやめ、専用住宅への用途変更を選んだ。「予算は2000万円台前半。新築すると、今より規模がずっと小さくなります。そこで既存の建物を生かすことにしました」とは河内さんの話。用途変更の申請も、いわゆるダウングレードにあたるため不要だったそうだ。

賃貸を専用住宅に変更する試みは、実際のところあまり聞いたことがない。ダウングレードで申請不要ならそもそも具体的な数はわからない。ただ、以上の利点は、少なくとも賃貸住宅の末路に用途変更の道もあると教えてくれる。そして、もしこれが賃貸の、とくに小さなアパートに示された新しい方向なのだとすれば、この作品はその先例として説明を試みる必要がある。奇抜な造形と配色の背後にあるものを見逃してはならない。

壁を立て、穴を掘る

既存の建物は、4戸を間仕切る3枚の壁、水まわりと居室を間仕切る1枚の壁により、全体が2×4のグリッドになっていた。河内さんは、まず4戸を貫く方向にもう1枚の壁を追加。全体を3×4のグリッドとし、そこから壁に穴を掘った。簡単にいえば、壁を立て、穴を掘る。2つの操作によってこの造形は説明できる。壁の追加は、子ども室、寝室、洗面、浴室、クロゼットなどを納めるのにちょうどよい大きさを想定したものだそうだ。では、その穴はいかにして掘られたのか。

前提として、防音が必要なピアノ室と、2階寝室は完全な個室になっている。そのうえで、穴は各室の壁に2つの点を設定し、これを結んでカットすることから始まる。カットする大きさは、各室の性格を考慮して決めたそうだ。たとえば、2階の子ども室は直交する壁に2点を設定し、その角を小さくひらいて中央の空間とつなげているが、リビングやダイニングは平行する壁に2点を設定し、大きくひらいて一体化している。しかし、隣り合う2室で共有される点が食い違うことも考えられる。そこで生きてくるのが最初に壁を1枚追加したことで、居室のあいだに階段室やクロゼットを挟み、居室がひらく大きさを優先して調整できる

ダイニングのテーブルを中心に、家全体をつなぐ吹抜けが中央に配置されている。

吹抜け（洗面室から）

吹抜け（階段室から）

各スペースから中央の吹抜けを見ると、壁のフレームに切り取られたような風景が見られる。

1階 子ども室

２階から１階の子ども室を見る。こうした隙間から、各スペースを垣間見ることができる。

吹抜け（2階）

家族の個室などの２階のスペースは、吹抜けのまわりに配置されている。

状況をつくっている。そうして、ぐるりと一周したのがこの穴。1、2階はできるだけ歩調を合わせているが、必要な面積を確保してずれが生じ、壁は斜めに立ち現れる。

斜めの壁が生む一体感

この斜めの壁にもルールがある。1階は内側に傾斜した壁と、外側に傾斜した壁、どちらの壁もある。しかし、2階は必ず内側に傾斜しており、天井付近で必ずグリッドの交点に収束する。山形をつくって納まる斜めの壁は、この住宅にひとつの一体感を生み出している。また、1階に残された小さな三角形2枚のピンク色のコーナーなど、明確なルールが、逆にあいまいな空間を発生させている点も興味深い。では、もっと根本。なぜ穴を掘るような造形の操作が選択されたのか。

高密度な風景をつくる

これについて河内さんは、「住宅は、家族の団欒室から水まわりまで、さまざまなキャラクターをもった空間の集合体です。複数の空間を整理して数を減らすのではなく、密度の高さを受け入れ、その多様性を生かすような設計がしたいと考えています。高密度な風景は、見ていて楽しいもの。家族のにぎやかな団欒の背景にもふさわしいのではないでしょうか」と説明する。穴を掘る、という操作は「高密度な風景をつくる」という考えに基づいていたのだ。穴を掘り、間仕切りで完全に隔てないことによって、いろいろなところから、その風景が目に飛び込んでくる。

そう聞くと、壁端部の仕様も納得がいく。まるで線のような薄い壁は、9㎜厚と45度にカットした24㎜厚の合板の組み合わせからなる。できるだけ薄く見せることで、壁が交差する部分がうまく納まる。すると、カットされた壁や床の端部ではなく、各居室に自然と意識が向かう。家具もそうだ。たとえば照明器具は、中央にガラスのシャンデリア、ダイニングにブリキ、キッチンに竹のペンダントライトなど、材料やデザインの統一が避けられている。そうした家具は、施主とともに数多くのインテリアショップを巡って集めたそうだ。まるでデパートのインテリアフロアのようだ。

ところが、配色だけがこのルールに従っていない。各居室がもつ性格の多様さを示すのであれば、複数の部屋をまとめる配色はルールとは違う。各個室に別の色や柄を設定したほうがその多様さを強調できたのではないか。

造形と配色に通底する意識

「使用した色は赤、青、黄（木）の3原色と白。多角形は数が少ないほど角が鋭角になり、その印象が強くなるので、居室ごとに色や柄を指定すると、形のほうが目立ってしまいます。そこで、ある程度その印象を和らげるために、できるだ

玄関脇のホール

南側の大きな開口から光がふんだんに入る。三角形のフレーム越しに吹抜け。

け角の多い多角形になるように配色しました」と河内さんは説明する。その結果、さまざまな角度の壁や空間があたかも平面に見える状態が生まれた。これを河内さんは、多くの角度から見た物体の形を平面で表現したキュビズムの絵画に例えている。すると、このキュビズムのような配色の操作にも、造形の操作と同じような意識が通底していることがわかる。それは、「限定してから開放する」といったような意識。一枚壁を追加した後に掘ることで、より高密度な風景が得られる。平面的に配色をすることで、単純に立体があるのではなく、平面の中に立体がある、という奥行きのある風景が得られる。いい例えかどうかはわからないが、立った状態からではなく、一度しゃがんでからジャンプする、そんな意識だ。

「限定してから開放する」という意識のもと、壁を立て、穴を掘り、色を塗る。かつて人と人とを分けた壁が、今度は家族をつなぐ間仕切りとなり、高密で奥行きのある風景をつくる。思えば賃貸住宅は高密さと奥行きの深さを象徴する建物のひとつ。河内さんの意識や操作は、その性格をじつに肯定的にとらえたもので、中古アパートの一部が進むかもしれない方向にはぴったりであったと思う。「アパートメント・ハウス」は苦境にある賃貸経営の未来を示す。その振る舞いはなんとも鮮やかで楽しげである。

余談だが、河内さんの図面には中央の空間に室名が記されていない。中廊下から接続すれば「中廊下型」、居間から接続すれば「居間中心型」……。家族が暮らしていくなかで、あるいはほかにもいくつかの作品が設計されていくなかで、この中央の室に名前が付いたときは、何かひとつの型が出来上がるのかもしれない。おおげさかもしれないが、そんなことを想像させる作品であった。

2階 子ども室（南側）

2階の個室は壁に囲われ、プライバシーが確保されている。

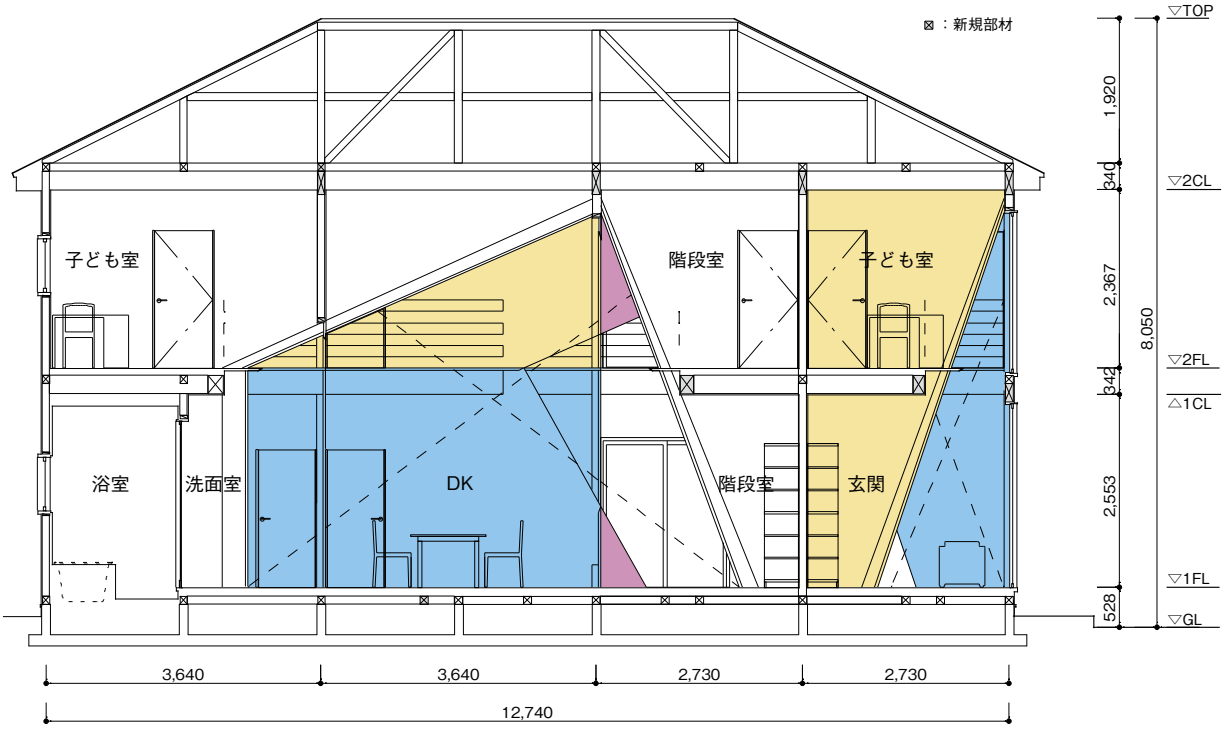
2階 階段室（南側）

色鮮やかな吹抜けまわりに比べ、2階は落ち着いた色使い。

断面図

0　1　2m

1/100



東側外観

アパートだった頃の８住戸の開口部を残している。それぞれに異なる色のカーテンを掛け、内部空間と連動させている。

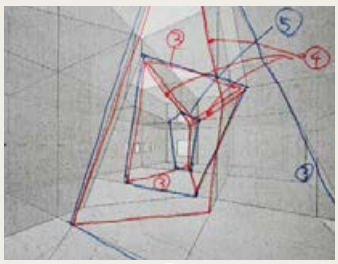
間仕切りのエッジ

間仕切りの壁が薄く見えるように、エッジにテーパーを付けている。壁が交わるところは複雑に。

Apartment-House

スタディ 3

穴のあけ方によって、
2次元の図形が
見えてくることを発見。

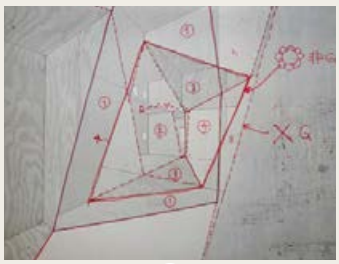


スタディ 4

さらに多くの
平面図形が
見えるように調整。

スタディ 5

その2次元の図形を
強調するように、
色を塗り分ける。



スタディ 6

3次元の立体を
感じさせないように、
元の界壁とずれるように調整。

南側外観　　南側に大きな開口がある。

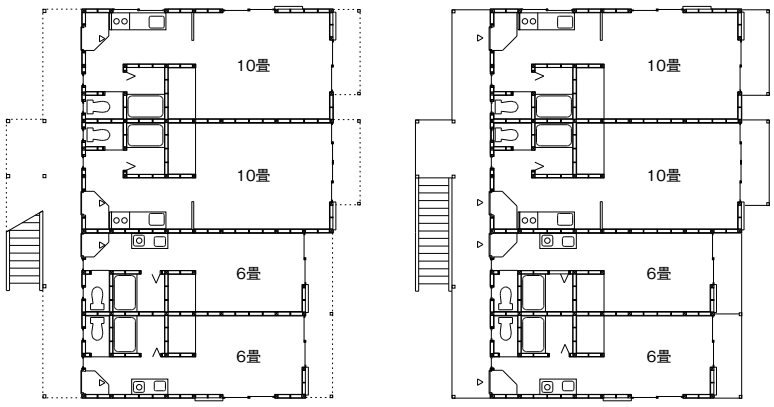
「アパートメント・ハウス」

建築概要	
所在地	千葉県千葉市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	河内一泰／河内建築設計事務所
構造設計	MID研究所
構造	木造在来工法
施工	杉本興業
階数	地上2階
敷地面積	198.35㎡
建築面積	99.37㎡
延床面積	177.31㎡
設計期間	2012年9月～2013年10月
工事期間	2013年11月～2014年3月
おもな外部仕上げ	
屋根	スレート板 平葺き(既存)
外壁	窯業系サイディング(既存)UP
開口部	アルミサッシ(一部新規)
おもな内部仕上げ	
リビング・ダイニング・キッチンほか	
床・壁・天井	ラーチ合板 t=9㎜ ワックス
浴室	
床	磁器質タイル(白) t=10㎜
壁	FRP防水(白) t=3㎜
天井	珪酸カルシウム板 t=10㎜ VP
玄関	
床	磁器質タイル t=24㎜
壁・天井	ラーチ合板 t=9㎜ OSM

改修前の平面図

0　2　4m

1/250

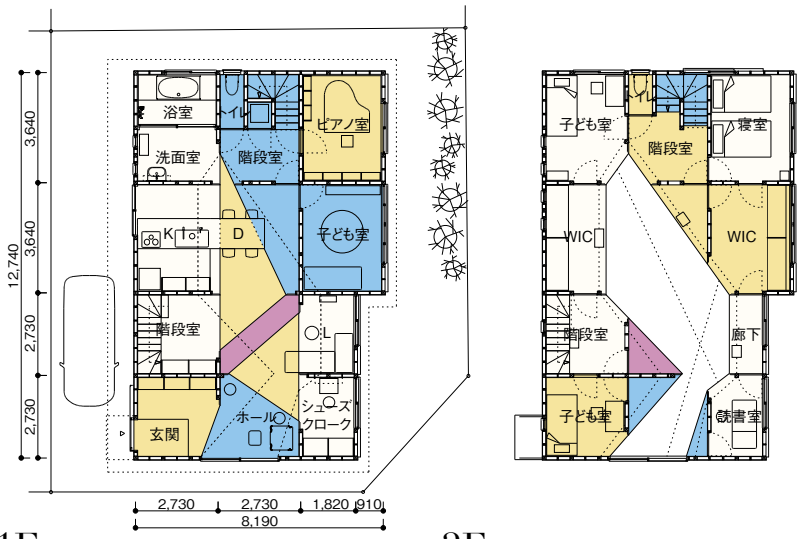


1F　　2F

改修後の平面図

0　2　4m

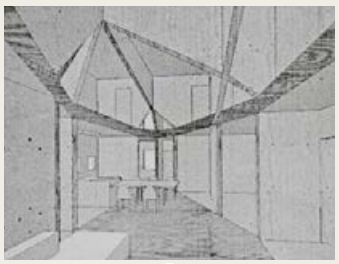
1/250



1F　　2F

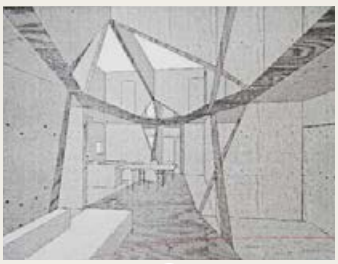
間仕切りのダイアグラム

複雑な形態と色彩のスタディ



スタディ 1

上下階の穴のあけ方を検討。垂直にあけた場合。



スタディ 2

上下階の穴のあけ方を検討。斜めにあけた場合。

Special Feature
Separate but Connected Space
Case Study 2

特集／つなぐ思考
――間仕切りのテクニック
ケーススタディ2

作品

「H邸」

設計

藤井由理

通常、間仕切りは縦横に
空間を仕切っていくものだが、
「H邸」では一直線に並べられている。
そこには、間仕切りの壁と壁のあいだの
「空間」だけが存在する、
純粋な構成が現れているように見える。
この純粋さが何を生むのか。

取材・文／豊田正弘　写真／藤塚光政

リズムよく並ぶ、間仕切りの列

２階の板の間から、和室、廊下、ミニキッチンを見る。６枚の壁が積層し、サイドからのほのかな光が、そのレイヤーを際立たせている。

東京近郊のなだらかな丘陵、やや稠密な住宅街の空き地越しに、「H邸」はキュービックな顔をのぞかせた。ダークグレーの壁面に直交して、白い壁の断面が連なる。そのたたずまいは目地と水切りでエッジを利かせつつ、モルタル系の仕上げで周囲に溶け込んでいる。

白い壁のあいだをまわり込むように玄関に入ると、そこには不思議な空間が展開していた。外部の印象そのままに白い壁が内部を間仕切り、そこにあけられた矩形が位置・大きさを少しずつ変えながら奥へと続いていく。2階でもその風景は同様で、外部アプローチからテラス・ベランダまで壁の数は10枚におよぶ。

不規則な間隔、相似形で抽象的にくり抜かれた開口、一方で床・壁・天井の取り合いには大きな目地……。こんな並列した間仕切りの空間は、これまでに経験がない。設計者の藤井由理さんに話を聞いた。

意味でなく感覚でつながる空間

藤井さんはこの住宅を「セリーの建築」と説明する。

セリーとは、フランス語で「系」「列」を意味し、相似性により互いに接合しあっていく概念で、さまざまな芸術にも通じる考え方だという。たとえば現代音楽では、十二音技法の進化形としてセリエリズム（セリー技法）があり、シェーンベルク、ヴェーベルン、ブーレーズらの作曲家がいる。またアートでは、キャンベルの同じスープ缶をさまざまな色彩で描いたウォーホルの「シリーズ」（セリーの複数形）などが名高い。

建築家のダニエル・リベスキンドはもともと音楽を志望し、代表作の「ユダヤ博物館」（1998）ではそのコンセプトのひとつとしてシェーンベルクの未完のオペラ「モーゼとアロン」を挙げている。藤井さんはリベスキンド事務所でセリーという言葉に出合い、それが担当した展覧会のキーワードだったこともあり、建築の手法と関連づけて考えを深めていったそうだ。

「セリーの建築」とは、相似の形など同系列のものがあまり強い意味をもたずに、ただ隣り合ってつながっていく建築。たとえば古典建築は中心性やヒエラルキーなどの意味を強く宿している。しかしそうした意味をはぎ取っていくと、空間とは「空」の「間」だ。そこでその間をただつなげていく。意味ではなく、感覚で空間とかかわること。

藤井さんは前作の「新宮島邸」（2012）から「セリーの建築」を試みた。それは父・藤井博巳さんの初期代表作「宮島邸」（1973）の建て替えであり、博巳さんはその発表時に「負性の建築化」を掲げ、床・壁・天井をグリッド・パターンで覆って、ものとものをつないでいる意味、つまり建築が惰性的にもつ意味を消去した。「新宮島邸」ではその考えを踏襲しつつ、身体的にそれとどうかかわるかをテーマにしている。

そして発想された白い壁の群れ。それは、古典建築のようにギュウギュウとつながってはいない。たとえば現代の人間同士の関係を考えてみよう。そこでは先生と生徒、上司と部下のあいだでもヒエラルキーのある窮屈なものではなく、個をもちながらのゆるいつながりが求められる。白い壁にうがたれた相似形の穴にそうした関係が表現されている。

大きな目地が伝えるもの

階段まわり（2階）

廊下から階段を見る。部屋の境とは別に間仕切りの壁が連なっている。奥には、階段と和室をつなぐ窓があり、外光を内側に届ける。

「H邸」の空間を細かに見ていこう。

まず、白い壁の間隔が不規則なのは、それが機能ごとに部屋を分ける壁とは限らないから。「新宮島邸」では白い壁がほぼ機能に対応していたが、ここではいわゆる「部屋」の中を壁が横切るところもある。壁の位置は、何かのモジュールによることもなく、柱などの構造の位置、浴槽などの設備のサイズ、さまざまな使い勝手、そして身体的なものとのつながりなどを考慮して、「結果としてこうなった」そうだ。

図面を見る限りではこの壁の連続は少々わずらわしく、洞窟を抜けていくようにも感じられるのだが、実際はまったく異なる。105㎜角の柱を12・5㎜厚のプラスターボードでくるんで130㎜の壁厚がありながら、それぞれの開口は幅・高さとも想像以上に大きい。その構成が「壁」とも「間仕切り」ともつかぬ印象を与え、「ワンルーム」や「閉塞性」といった既成の感覚に揺さぶりをかけてくる。

そして、色の塗り分けと、目地の使い方によって「セリーの建築」はそのコンセプトを明確なものにしている。10枚の白い壁に対し、直交する天井・壁はすべてグレー。壁・天井・床の取り合い部分にはすべて目地が入り、その「勝ち負け」、6㎜、12㎜、15㎜の3種類の目地幅について厳密なルールが定められた。

白い壁には、天井・グレーの側壁との間に12㎜、床との間に15㎜の幅で目地が入れられ、浮き上がるようにその存在感が強調される。実際、12㎜という目地は相当に大きく、中にまでグレーの塗装が

延び、目地底は白いことが目視できる。それは不陸やクラックを抑えるというより、明らかに「建築的な目地」。そしてまた、そこにスパッと切り取られた開口を際立たせている。

移動することの楽しさ

さらに図面から読み取りにくいことがもうひとつある。それは、相似の開口部を移動することで得られるリズムのようなもの。藤井さんの言う、身体的、感覚的なかかわりという意味が徐々に実感されてくる。

そこでは、壁と壁のあいだにある「ふところ」の深さにより、動きに伴って見え方がどんどん変化していく。それは音楽的な体験を思い起こさせる。そして視覚だけではなく、周囲から聞こえる音の気配、窓からの距離による室温なども変わる。その様子は建築面積40㎡ほどのコンパクトな住宅とはとても思えない。

また生活をするうえで、2階和室の前後に配された引き分けの吊戸がとても効果的な装置となっている。「建具のない開口」という空間イメージを崩すことなく、開閉を調整すると室内の明るさは大きく変化し、完全に閉めると落ち着いた和室で就寝ができる。層状の空間構成と一人住まいのスタイルとをさりげなく成立させているのだ。

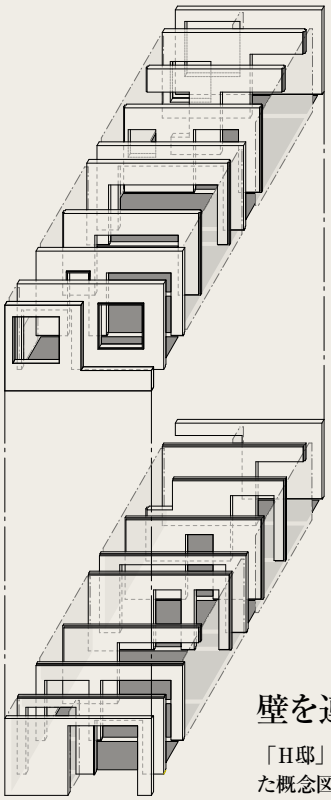
「人間と空間との対話のなかで、無意識につくられていくものがある。この空間に住むことで、人が少し変わっていったり、自由になっていければ」と藤井さん。「H邸」で示された空間は、藤井さんにとって原点のようなものなのだろう。まず自由な空間があり、そこで人が何かをするきっかけとして、開口のある壁がただ連続している。それは住宅でも公共建築でも変わらない。ここはたまたま住宅だったので、そこにキッチンや居間や寝るスペースがあるだけ……。

たしかに「H邸」を訪れると、われわれは空間に機能的なものを求めすぎているのではないかと思えてくる。あらゆる場所で、「ここは何をするところ？　それはなぜ？」と。そして昨今の住宅設計の風潮が、シンプルで建築家がつくり込まないことばかりをよしとするのにも疑問が湧いてきた。ここに並べられた間仕切りは、きわめて純粋に、そして素直に建築と向き合った姿を示しているのではないだろうか。

ダイニングから廊下越しに玄関を見る。

1階 廊下

間仕切りのダイアグラム　H Residence



壁を連ねる構成

「H邸」の壁だけを描いた概念図。各壁の距離や開口部の位置などによって、それぞれの関係性が築かれるように意図されている。

2階全景

手前から廊下、和室、板の間。各室は、引き戸で間仕切ることもできる。

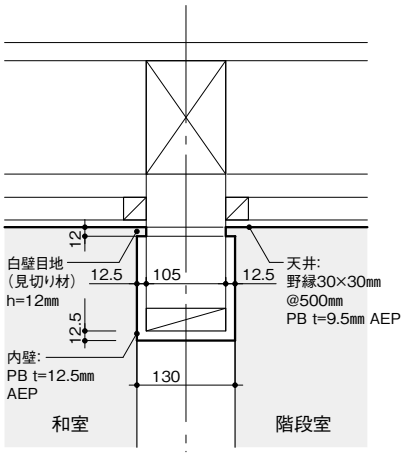
1階 ダイニング

キッチンから見る。ダイニングの中央にも、白い壁が横断している。

詳細図（壁の目地）

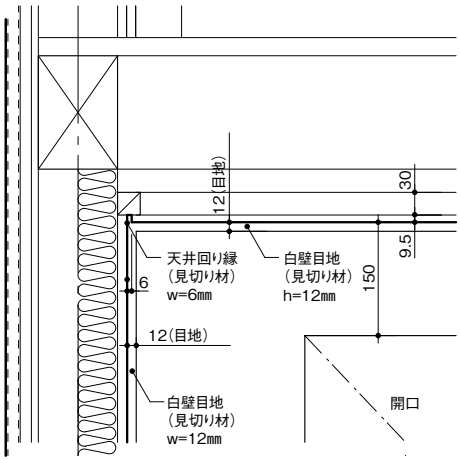
0　10　20cm

1/10



目地

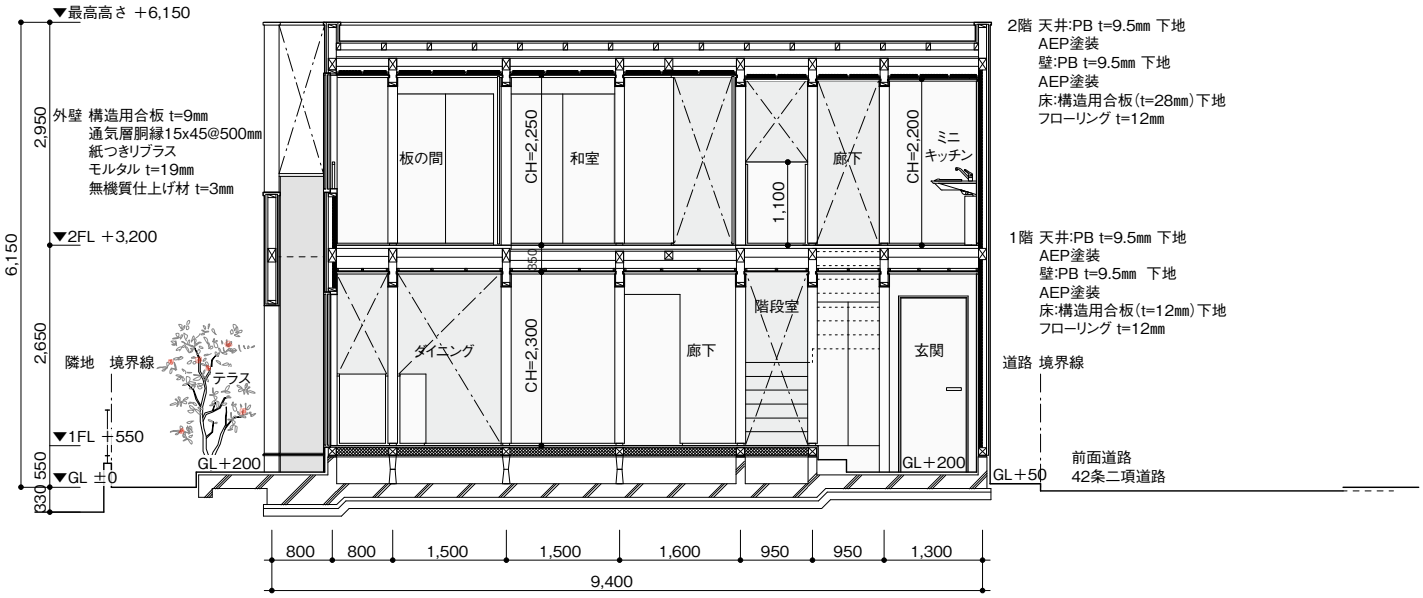
壁上部のディテール。壁の独立性が際立つように、目地幅が通常よりも広めにとられている。



断面図

0　1　2m

1/100



北側のアプローチ側の外観。上部の開口から、窓を経て、階段越しに和室まで光を届ける。

「H邸」

建築概要	
所在地	神奈川県横浜市
主要用途	専用住宅
家族構成	1人
設計	藤井由理／藤井建築研究室
構造設計	A.S.A
構造	木造在来工法
施工	新都市建設
階数	地上2階
敷地面積	180.19㎡
建築面積	41.03㎡
延床面積	78.20㎡
設計期間	2012年6月～2013年9月
工事期間	2013年10月～2014年3月

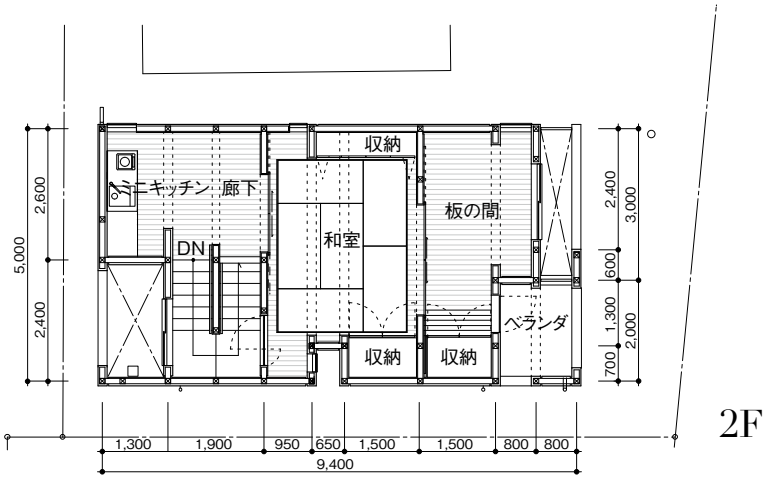
おもな外部仕上げ	
屋根	構造用合板下地 FRP防水
外壁	モルタル下地 無機質仕上げ材 こて塗り 通気層付き
開口部	アルミサッシ
外構	砂利敷き、 土間コンクリート 木ごて押え

おもな内部仕上げ	
キッチン	
床	フローリング t=12㎜
壁	PB t=12.5㎜ AEP、一部タイル貼り
天井	PB t=9.5㎜ AEP
トイレ・洗面所	
床	CFシート
壁	PB t=12.5㎜ AEP、一部タイル貼り
天井	PB t=9.5㎜ AEP
ダイニング	
床	フローリング t=12㎜
壁	PB t=12.5㎜ AEP
天井	PB t=9.5㎜ AEP
和室・板の間	
床	フローリング t=12㎜、一部畳敷き
壁	PB t=12.5㎜ AEP
天井	PB t=9.5㎜ AEP

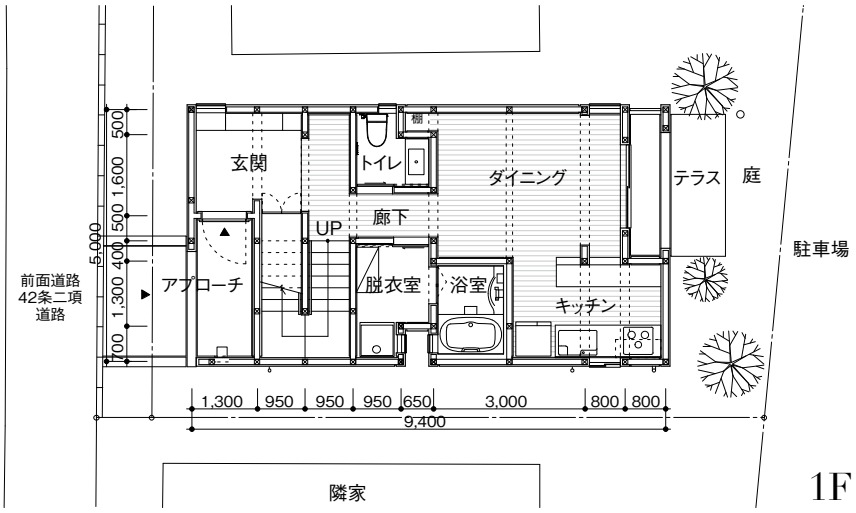
平面図

0 1 2m

1/150



2F



1F

南側外観

壁の列の構成は、色を塗り分けることで、外壁でも表現されている。手前の壁は、部屋への日光の直射を避ける庇のような機能ももっている。

Kuno Hiroshi

Special Feature
Separate but Connected Space
Case Study 3

特集／つなぐ思考
――間仕切りのテクニック
ケーススタディ3

作品
「弟の家」

設計
久野浩志

間仕切りのない
ワンフロアが目指された空間。
一方、住み手にとっては、部屋が必要だった。
その両立のため、部屋をつくりつつも、
全体をつなげているのが、
湾曲したU字の間仕切り。

取材・文／本橋仁　撮影／川辺明伸

U字の間仕切りが、上空をつなぐ

6×16mほどの長方形の空間に、U字に湾曲した3枚の間仕切りがしつらえてある。部屋を仕切りながらも、上空ではつながっている。

ユーティリティ（UT）

壁に囲われた空間を、短辺方向に見る。U字の壁は、中央では腰壁だが、両端部では天井までの高さがある。

「弟の家」のU字に湾曲した壁を見て、「空間概念 期待」という絵画を思い出した。青や赤一色に塗られたキャンバスに、すっと差し込まれたナイフによる裂け目。現代芸術家、ルーチョ・フォンタナの代表作である。そのとてもシンプルな方法でフォンタナは、絵画のキャンバスにも向こう側があることを私たちに教えてくれた。この作品は、ふたつのことを、私たちにつきつけているように思う。

ひとつは、何が絵画を、絵画という芸術として成立させているのか、という問いかけである。肖像画、風景画、抽象画、構成主義などの描かれた世界に、見るものは引き込まれるが、そのいずれの世界も、キャンバスという「地」が支えているのだ。その事実をフォンタナは、裂け目をとおして、私たちに見せつけたのである。

そしてもうひとつは、裂け目はそれ自体では存在し得ない、というあたりまえの事実である。この作品で目を奪われるのは、漆黒の空間をのぞかせる裂け目ではあるものの、その裂け目は、キャンバスがなければ存在し得ない、という空間性を私たちに認識させた。

長い前置きとなったが、北海道小樽市に建つ「弟の家」のU字の間仕切りが生み出す効果には、フォンタナの絵画に似た気づきを、与えられたのである。

やはり、部屋がほしい

この住宅の平面は、とてもシンプルな形をしている。東西に伸びた大きな矩形の平面に、間仕切りが同じ向きに3枚配されている。それにより、部屋が4つ生まれている。ここに、トイレとお風呂が、少し出っ張って取り付く。言葉で説明できるほど、明快。その計画には潔さすら感じる。また、断面もシンプル。車庫を地階にもつほかは、生活の場は大きな四角い箱ひとつといった様子である。特徴といえば、天井の高さと東西に設けられた大きな窓であろう。天井高は4m30cmと、とても高い。北海道などの寒冷地では、こうした高い天井やコールドドラフトを生み出す可能性のある大きな窓は、少し前まで避けられてきた。しかし、ペアガラスなどによる断熱性や気密性の向上により、これまでできなかったようなデザインも、今では乗り越えることが可能になってきたという。

建築家の久野浩志さんは、この住宅を建てるにあたり、敷地のなかでも緑豊かな手宮（てみや）公園を背にし、小樽の町が見渡せるロケーションを選んだ。この場所に寝転んでみると、こうした周囲の環境に包まれた感覚を、住宅に置き換えたいという想いをもった。そこで、間仕切ることなく住宅のスケールを超えた箱で家族の生活を覆う、ワンルームの住宅のイメージが、最初に浮かんだ。距離感や家具のしつらえだけで、生活の場を与えることはできないだろうか。そんな住宅が当初案であったようだ。実際に竣工した建物でも、周囲の環境がよく生かされ、当初の設計思想は引き継がれている。

しかし、間仕切りのないワンフロアという案に対し、住み手である弟さんから要望が入る。「やはり、部屋がほしい」と。

西窓

ＬＤＫから西窓を見る。市街地側の西窓は、ハイサイドに設けられている。Ｕ字の壁越しに、窓からは空だけが見える。

間仕切りが、住宅をつくる

冒頭で触れたフォンタナが最初に提起した絵画への問いを、住宅にあてはめてみたい。何が住宅を、住宅として成立させているのか。大仰な問いかけではあるが、この問いかけに対するヒントを、この兄と弟の対話のなかに見つけた。

それは、住宅たらしめる要素のひとつに、やはり「間仕切り」は挙げられるだろうということである。機能主義が日本にもち込まれて以来、いかに必要な機能を計画的に配置するかが追い求められてきた。つまり、いかに間仕切るかが生活の質を向上させてきた、ともいえる。その向上の過程で、日本特有のｎＬＤＫという考え方も生み出された。世界に目を向ければ、より自由度をもちつつ、住宅を産業化しようという、ＳＩ住宅などのさまざまな試行錯誤が行われてきた。しかし、こうした歴史の流れのなかでも、間仕切りという存在が排除されることはなかった。それは住宅が間仕切りを必要としてきた、ということを自ずと語っているとも思える。

名づけようもない機能

しかし、反省もある。フレキシビリティが欠けていたところもあるだろう。仮に竣工時に子ども部屋が必要だったとしても、子どもが大きくなれば、子ども部屋はいらなくなる。兄弟が大きくなれば、それぞれの個室がほしくなる。また現在の戸建住宅では、居間は1階、個室は2階という構成が、大部分を占めているのも事実である。

生活をするということは、ご飯を食べる、夜に寝るという行為以外にも、名づけようもない瞬間があるはず。家にこそ、そうした瞬間を包容する機能が必要じゃないか、と久野さんは言う。そこで弟さんからの要求に対して、3枚のＵ字型に湾曲した間仕切りという変化球を返してみせた。間仕切りの上方は、すっぽりと抜けている。この湾曲によって、間仕切ることを、0と1の関係ではなく、まるでグラデーションのようにとらえ直したのである。

この間仕切りは、住まい方を押しつけることもしないし、一方で何もない乱暴な自由さもない。住まい方に、少しの束縛を与える。それは、アイデアを与える、

間仕切りのディテール

Ｕ字の壁の小口には、白いと汚れが目立つので、薄い木が貼られている。

長辺方向に見ると、全室がつながっているように感じるが、短辺方向から見ると、各部屋が囲われた空間だと感じる。

LDK

西の部屋

といったほうが適切かもしれない。この壁によって、少し低い場所には机が、高いところにはコート掛けが、というようにものを置く場所が自然と決められていく不思議さがある。もちろん、それは今適した住まい方であり、大きな家具を入れたくなれば、コート掛けはその場所を譲るのだろう。

空気が見える

ここで終わりではない。この住宅の間仕切りの話には、まだ続きがある。この間仕切りには、もうひとつ、開口としての役割があると感じる。言葉を換えれば、空気を切り取る、という仕組みである。このU字型に湾曲した間仕切りは、ある高さから、天井までその両端を伸ばしている。この閉じたU字型は、もう立派な開口だ。そして、空気を、そして向こうの景色を切り取っている。照明の細いコードをスーッと頭の近くまで垂らしているが、それ以外に、無垢な天井を邪魔するものはいっさいない。

もしこれが壁のないワンルームの住宅で、向こう側までくまなく見通すことができてしまったら、この天井いっぱいを覆う、ぜいたくな空気の存在に気づくことはなかったかもしれない。空気が見える。そうとまで感じさせるものが、ここにはある。

キャンバスは、空気だった

どうやらこの住宅を見る限り、間仕切りにはふたつの役割がありそうだ。ひとつは、部屋を仕切ること。そしてもうひとつは、仕切られた向こう側の空気を感じさせること。先ほどのとおり、寒冷地においても、大きな窓や高い天井が今や可能となった。しかし、冬の長い北海道では、屋内で過ごす時間が長いことは変わらない。いくら技術が発展しようと、気候は同じである。この住宅は、小さいながらも、部屋をもつことと広い空間をもつことを、間仕切りによって実現した。さらに、この間仕切りは暖かい空気の存在を、現前させている。

窓の話をしなかったので、最後に少し触れておきたい。西の壁には、天井に接するように設けられた、大きな窓がある。大人でも見上げるほど高い。その窓は、木々が美しい公園とは逆を向いている。そこから見えるのは、ただただ空である。施主は、この住宅に住んで初めて、曇り空も美しいと気がついたという。

この住宅にいると、空気という存在を見ることができる。そんな気にさせる。フォンタナは、裂け目によってキャンバスを認識させたが、「弟の家」は、間仕切りによって上方に空気を、そして窓からは北海道の澄んだ空を見せてくれる。

間仕切りのダイアグラム　Brother's House

U字壁のイメージ

自然に囲まれた敷地のなかで、閉ざされない住宅をイメージ。外壁がなく、U字壁だけが置かれただけの空間が想定されている。

東窓

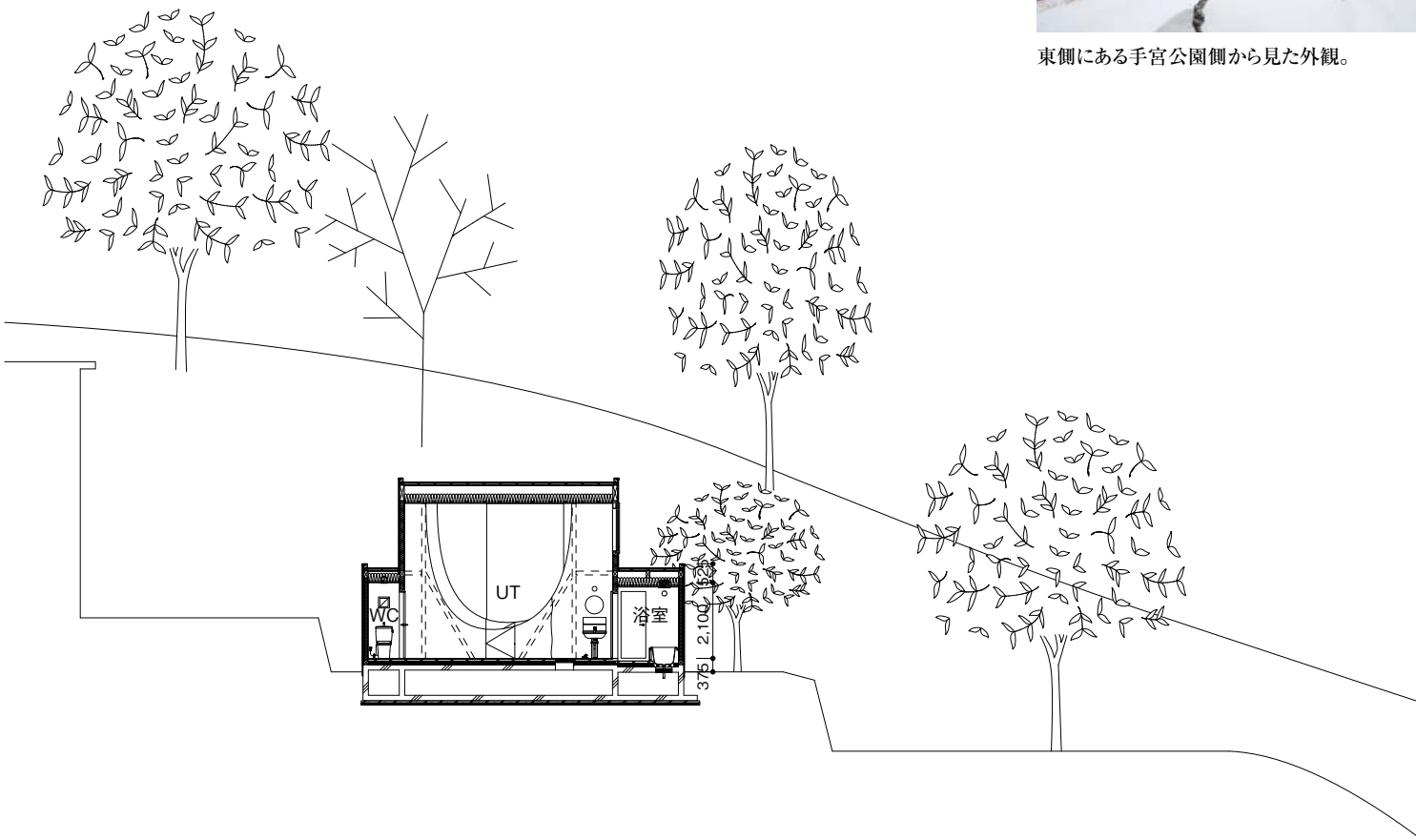
東側にあけられた大きな窓。敷地の隣に公園が広がり、緑や雪景色が見える。照明は、U字の壁と調和するように、コードをたわませている。

短手断面図

0 1 2m

1/200

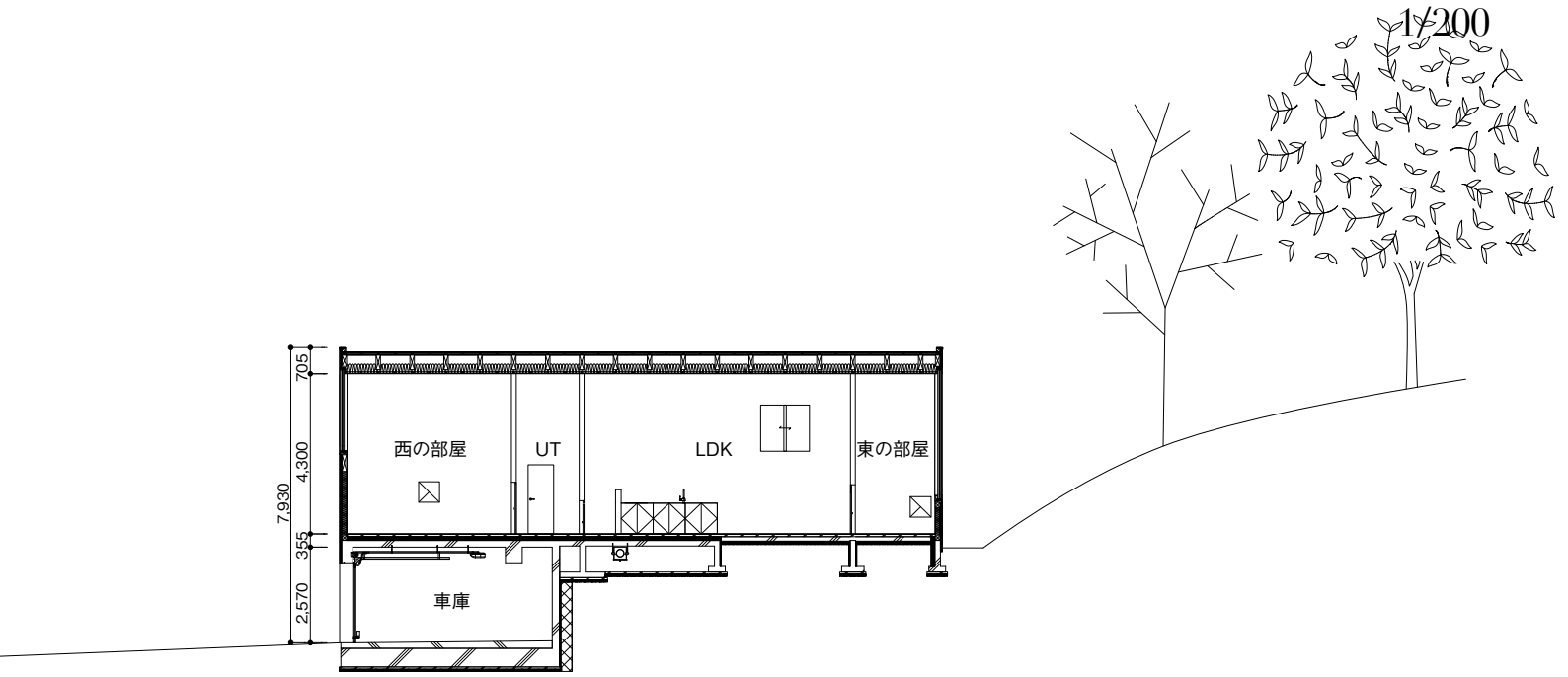
東側にある手宮公園側から見た外観。



長手断面図

0 1 2m

1/200



西側外観。地階には車庫がある。

「弟の家」

建築概要	
所在地	北海道小樽市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	久野浩志／久野浩志建築設計事務所
構造設計	長谷川大輔構造計画事務所
構造	木造在来工法（1階）、
	鉄筋コンクリート造（地階）
施工	平形工務店
階数	地下1階、地上1階
敷地面積	1,004.97㎡
建築面積	109.68㎡
延床面積	137.13㎡
設計期間	2012年6月〜2013年4月
工事期間	2013年5月〜2013年9月

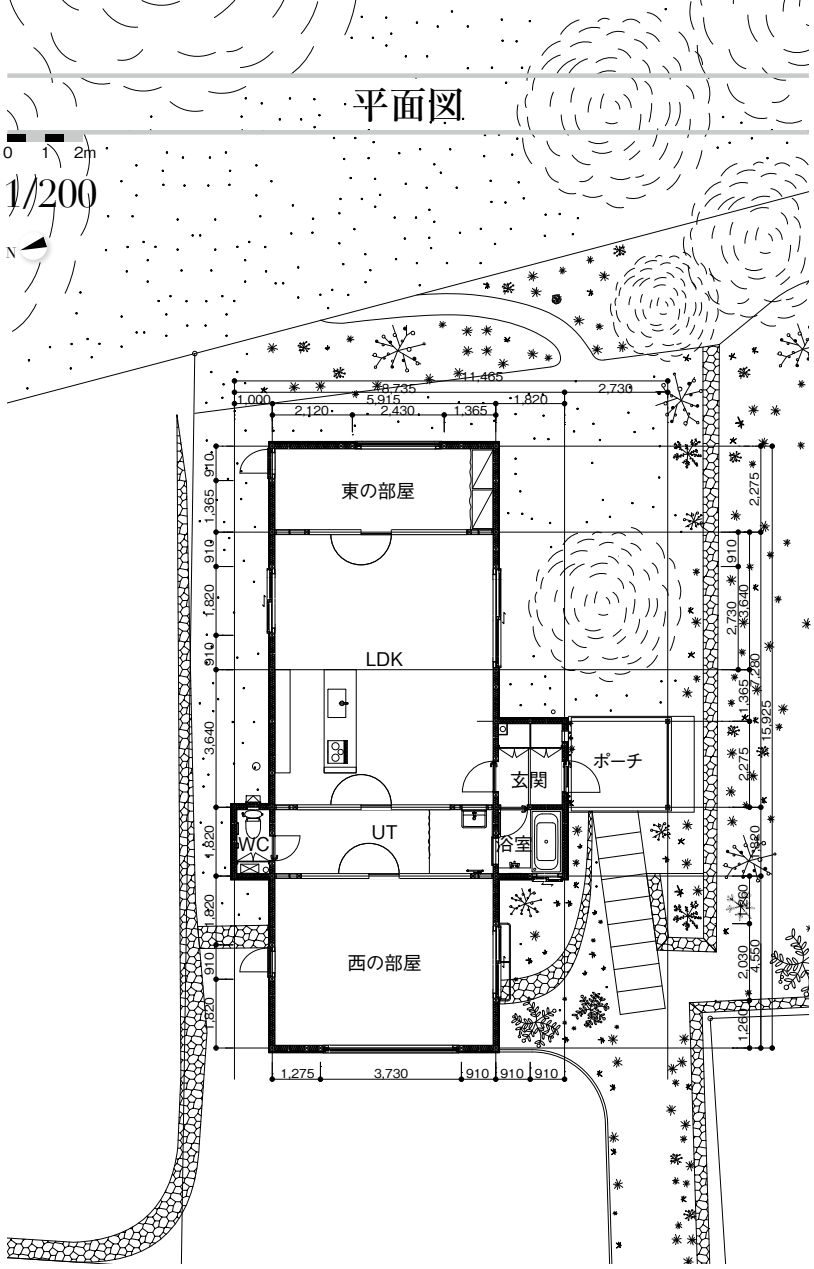
おもな外部仕上げ	
屋根	塩化ビニルシート防水
外壁	EPSボード 透湿性左官仕上げ
開口部	樹脂サッシ、木製サッシ
外構	アスファルト舗装

おもな内部仕上げ	
リビング・キッチン・寝室	
床	バーチ合板 t=12㎜
壁・天井	PB t=12.5㎜ クロス貼り+AEP
浴室	
床・壁・天井	FRP防水

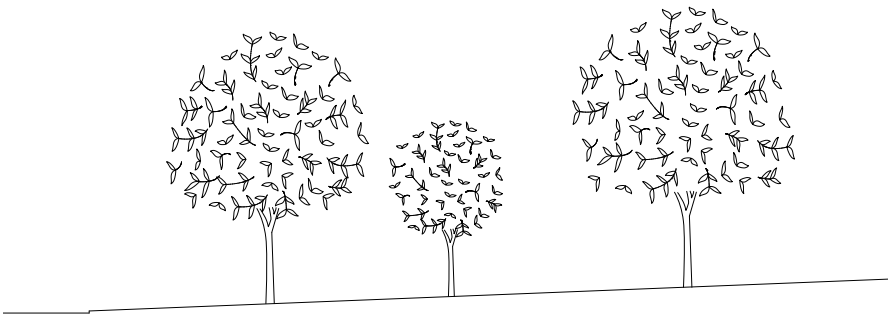
久野浩志

Kuno Hiroshi

くの・ひろし／1970年青森県生まれ、北海道育ち。93年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業。2001年久野浩志建築設計事務所設立。おもな作品＝「熊谷邸」(09)、「バール メンタ」(11)。



南側外観。外観は、
四角いキュービックな印象にまとめられている。
雪国らしく、大きなポーチ。



Special Feature
Separate but Connected Space
Case Study 4

特集／つなぐ思考
――間仕切りのテクニック
ケーススタディ4

作品

「羽根北の家」

設計

佐々木勝敏

建て主から、部屋の数が
13室ほしい、との要望があった。
13室ともなると、
空間を細かく間仕切ることになるが、
それでは一室があまりに狭くなる。
そこで、1坪ごとに仕切りつつも、
全体がつながった空間が考え出された。

取材・文／伊藤公文　写真／浅田美浩

1坪ごとの、見えない間仕切り

２階全景。垂れ壁と腰壁が1,820㎜角のグリッド状に設けられ、１坪が空間を構成する基本単位になっている。

目の前に広がる光景。

現前の事実だが、それを現実の状況として理解する手がかりが見つからない。愛知県岡崎市、木造2階建て住宅の2階。家族構成は祖父母と夫婦＋子ども3人の3世代、2世帯、7人。公園に面する住宅地。特別なところはなにひとつない。

それなのに、目の前にある光景はどうしたことか、普通の住まいに見られるはずの既視感がまったくない。理解の手がかりを得るべく、類似の光景を思い浮かべようとするが、すぐには浮かんでこない。しばらくすると、メサ・ヴェルデの岩窟住居「クリフ・パレス」の写真が突如として脳裏をかすめる。日干し煉瓦の壁によって区画された集落遺跡だ。シェア・オフィス？　あるいは整然としたキャンプ場？　よく整頓された古民家の納屋？　災害発生時の待避所？　イメージの断片が駆け巡る。けれども一向に焦点を結ばない。小さな困惑がさざ波のように押し寄せる。

1坪のグリッド

平面は1間（けん）（約182㎝）のグリッドで構成されている。間口が4間、奥行きが6・5間。

天井には構造体である80㎝弱の深い垂れ壁が降りている。一方、床面からは高さ90㎝の非構造体の腰壁が立ち上がっている。前者はグリッドに完全に則り、後者は原則としてグリッドに則っているが、部分的に中断し、取り払われ、あるいはずれている。垂れ壁の下端と腰壁の上端のあいだには110㎝の間隔があるが、そこにはトイレや浴室以外に透明、不透明を問わず、間仕切りはない。室内には柱がないので、立つと端から端まで見通すことができる。

グリッドが整然として支配的、かつ見通しのよい空間となれば、ただちにユニバーサルな一様の空間を思うが、実態はまるで逆だ。深い垂れ壁と高い腰壁が平面1間四方、1坪の、人を包み込むような単位空間を形成している。1坪ごとに見えない間仕切りがあるといってもよいかもしれない。そのために実際はワンルームでありながら、20余りの単位空間の集合のようにも受け止められる。空間の認識が両極のあいだで揺れる。

単位空間の独立性を強めているのが光である。全体には閉じた箱だが、トップライト、テラスへの出入口、2つの小さな窓、そして中央の階段と、上、横、下の開口部から光が射し込む。性質を異にする各方向からの光が、澄んだ明るみから淀んだ暗がりまで、ゆるやかな濃淡を描き出し、単位空間を強調しつつ、その規則的な連なりが単調に陥ることを救っている。とりわけ、トップライトの真下に設けられているインナーガーデンの存在が大きい。降り注ぐ日射しと勢いのよい緑によって、室内全体に開放感と活気がもたらされている。

2階（寝室1から）

手前から、1坪のディスプレイスペース2、テレビスペースと続く。天井からの垂れ壁は縦横に架けられた梁でもあり、その大きい梁成が柱のない空間を実現している。

間仕切りの痕跡が結界に

この2階の空間は、寝る、くつろぐ、こもる、遊ぶ、しまう、読む、テレビを見る、風呂に入る、といった日常のさまざまな行為を受け入れる場所を提供している。仮にそれらの行為の全体を再配分し、きっちりと間仕切られた部屋の形式に収めようとすると、10余りの極小の部屋と狭くて長い廊下の組み合わせに行き着いてしまう。快適さとは無縁の、窒息してしまいそうな窮屈な空間だ。それを避けようと考え出されたのが、この垂れ壁と腰壁からなる空間である。

設計者の佐々木勝敏さんは言う。

「移動するときは立っているので視線が通ったほうが機能的にも気分的にもよい。その他の時間は座ったり、寝転がったりして過ごすのだから、ある程度の高さの壁が立ち上がっていれば視線がさえぎられ、一定のプライバシーが保たれます。腰壁の高さを慎重に検討し、90㎝とすれば、座位や臥位のレベルを床面に設定したときに大人でも十分に姿が隠れ、かつ立ったときに視線がすっきり通ると判断しました」

完全に間仕切られた複数の部屋がある。その全体に外圧をかけて体積を縮めていく。圧力が高まる。臨界に達すると、圧力に耐えきれずに間仕切りがはじけ飛ぶ。空間はひとつになり、間仕切りは痕跡として残る。その痕跡は一種の結界のようなものとして、部屋の区分けをやわらかく示す働きをする。

「羽根北の家」は、ごく普通の出発点から発し、意想外の終着点に至っている。常識的な経路をたどっていれば、間仕切りははじけ飛ばず、必ず縮小したままに残る。なんらかの発見的な視点なしに、間仕切りは決してはじけ飛ばない。そこ

2階（脱衣室から）

トップライトが2カ所あり、その下が植栽のある1坪のインナーガーデンになっている。

1.5坪のテレビスペース。1坪を基本にしながら、隣り合ったスペースをつなげている。

には秘策があるのだろうと問いただすが、佐々木さんは言う。

「特別な方法はありません。あらゆる可能性を追求して、得心がいくまで案を考えつづけるだけです。この住宅に限らず、ひとつの住宅で大小のバリエーションを含めると300案くらい考えます。そこから30案くらいに絞っていってさらに検討し、最終的にはこれしかないというひとつの案に収束させます。クライアントにはつねにひとつの案だけを提示し、代替案を提示することはありません」

秘策はないのだった。あちこちと迷走し、苦闘し、それでもゆるまずに直進する。その果てに、巧まざる独創が姿を現し、前例にとらわれない飛翔が遂げられるのだった。

祖父母と孫の距離も近い

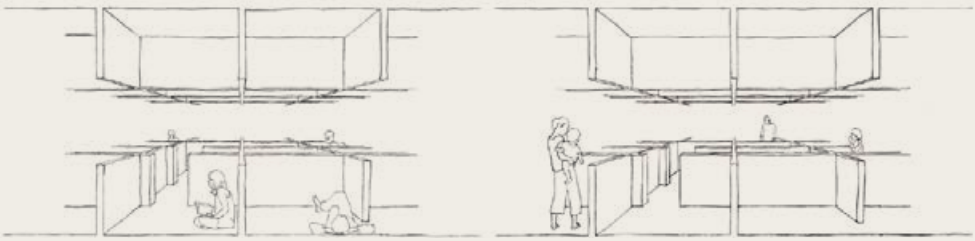
2階の空間構成は、1階とセットで成り立っている。

1階は、北側の正面に大きな引き戸があり、入ると土間、そのままま っすぐに進むと祖父母（親世帯）の住まい、右手に進むと子世帯の住まい。両世帯のあいだには階段と収納のブロックがあるが、北側のエントランスは共通で、南側のダイニングにある間仕切りは引き戸で完全に開くので、それを開け放つと両世帯は完全につながる。子世帯と同様、親世帯の住まいも水まわりを除くと固定の間仕切りがないので、事実上、住宅全体がワンルームになっている。

実際、子どもたちは階段のまわりを駆

間仕切りのダイアグラム　House in Hanekita

姿勢によって異なる空間との接し方



垂れ壁と腰壁によるグリッド状の空間では、座ると周囲の視線からプライバシーが確保された空間になり、立ち上がると2階全体が見渡せるワンルームのような空間に感じられる。

2階各室

2坪ほどの寝室。横になると、周囲からは見られない半分は閉鎖された空間になる。

写真中／広い土間の玄関。
写真下／ダイニング。いずれも吹抜けで2階とつながっている。

1階

け巡り、元気に階段を上下して、室内運動場の趣を呈している。吹抜けが2カ所あるので、上下階でも声がよく通り、気配が伝わる。3世代の成員間の距離がきわめて近い。これ以上縮めるのは困難と思えるほどに近い。

このような姿になったのは、施主側からの直接の要望というよりも、設計者側が施主の潜在的な要望やニーズを引き出し、提案に置き換えていったようだ。その好例が子世帯1階の壁沿いに設置された造り付けの長いテーブルである。このテーブルに沿って、親子5人の昼間の活動のほとんどすべてがなされるという。料理をつくる人のすぐ隣に、遊ぶ人、学ぶ人がいて、そのすぐ隣にテレビを見る人がいる。親子の距離が近く、関係が密である。そういえば、北側にある公園で遊びまわる子どもたちの姿は、祖父母の住まいのどこからでもよく見通せる。成員間の関係は住宅内を越え、外部にまでおよんで考えられている。

間仕切りが生み出す新しい家族の距離

2世帯住宅というと機能的に完結した住戸を上下に重ね、そのあいだになんのつながりもつけない事例が多い。そうしたほうが両世帯の関係を良好に保つためにはよいと推奨されていたりする。1世帯のなかでみても、成員のそれぞれが強固な間仕切りで囲われた個室を確保し、共通で使う部屋は別個に設けられる事例が一般的だ。

「羽根北の家」は、それらのいずれとも画然と異なっている。たたずまいは穏やかだが、間仕切りのありようを根本から考え直すことによって、新しく、過激でさえある地点にたどり着いている。これを成員のプライバシーのレベルを低めながら、その補償として共同の場の快適性や機能を最大化していく方法とみれば、シェアハウスの進化形とも考えられるのではないか。

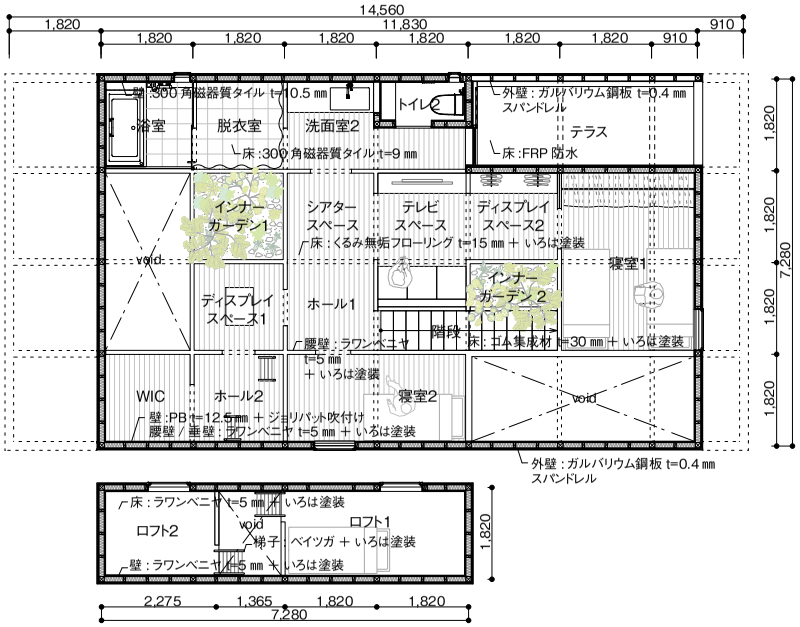
家族像、住宅像が揺れ動くなかで、住まいのあり方もまた分岐の一途にあるように思えるが、まったく異なると思えた枝先の先端が、系統だった思考からは生まれ得ない発見によって近づき、思わざる回路が形成されるかもしれない。「羽根北の家」はそうした偶発的な進化の可能性を抱かせる。

平面図

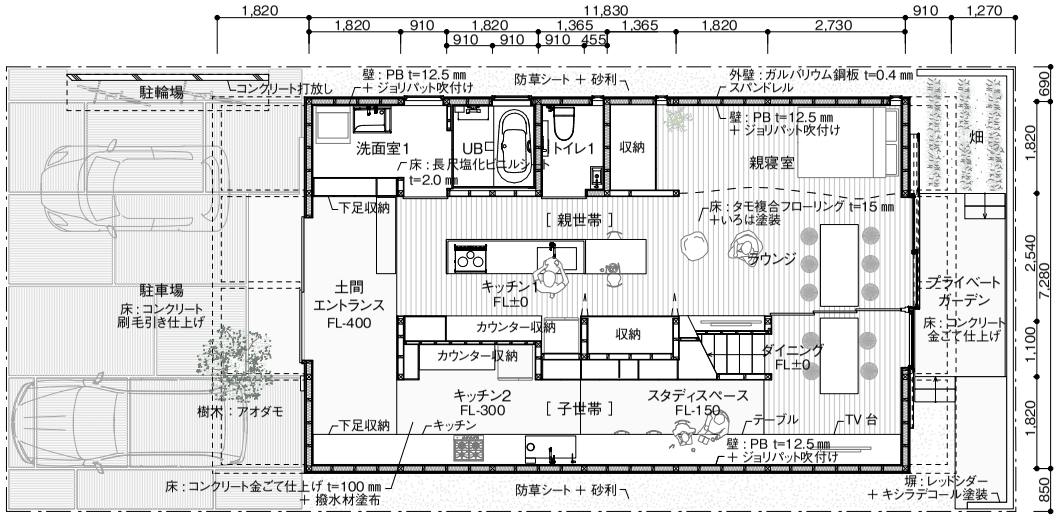
0 1 2m

1/150

北側外観。向かいには公園がある。



2F



1F

Sasaki Katsutoshi

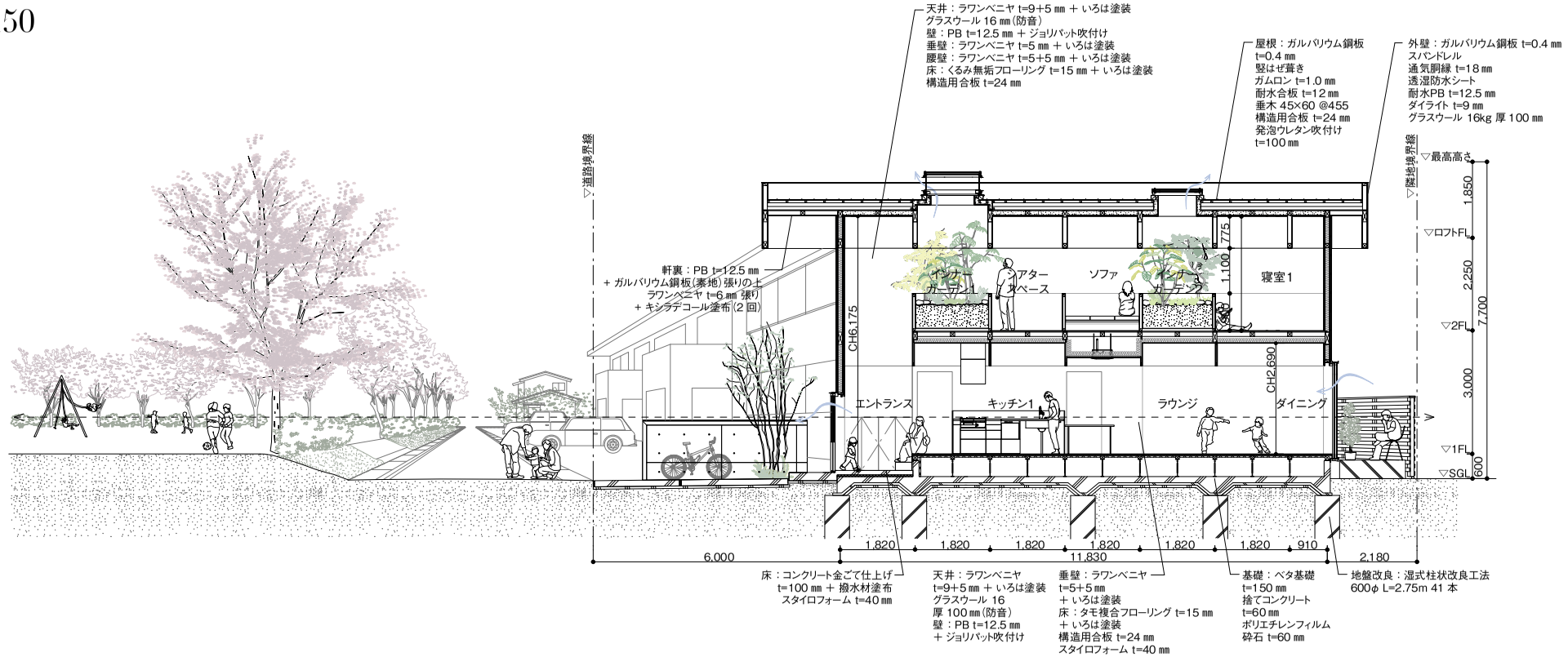
佐々木勝敏

ささき・かつとし／1976年愛知県生まれ。99年近畿大学工学部建築学科卒業。2008年佐々木勝敏建築設計事務所設立。おもな作品=「OSHIKAMO」(11)、「UNOU」(12)、「栄町の光溜」(13)。

断面図

0　1　2m

1/150



「羽根北の家」

建築概要

所在地	愛知県岡崎市
主要用途	専用住宅(2世帯)
家族構成	両親+夫婦+子ども3人
設計	佐々木勝敏／ 佐々木勝敏建築設計事務所
構造設計	寺戸巽海構造計画工房
構造	木造在来工法
施工	丸平建設
階数	地上2階
敷地面積	176.47㎡
建築面積	92.10㎡
延床面積	149.07㎡
設計期間	2012年11月～2013年6月
工事期間	2013年7月～2014年4月

おもな外部仕上げ

屋根	ガルバリウム鋼板
	竪はぜ葺き t=0.4㎜
外壁	ガルバリウム鋼板
	スパンドレル t=0.4㎜
開口部	木製建具、アルミサッシ
外構	コンクリート刷毛引き仕上げ
	白石敷き

おもな内部仕上げ

土間エントランス・キッチン2・スタディスペース

床	コンクリート金ごて仕上げ
	撥水材塗布
壁	PB t=12.5㎜
	ジョリパット塗装(ゆず肌)
天井	ラワンベニヤ t=9+5㎜ いろは塗装

ダイニング・ラウンジ・キッチン1・親寝室

床	タモ複合フローリング
	t=15㎜ いろは塗装
壁	PB t=12.5㎜ ジョリパット塗装(ゆず肌)
天井	ラワンベニヤ t=9+5㎜ いろは塗装

トイレ1・2・洗面室1

床	長尺塩化ビニルシート t=2.0㎜
壁	PB t=12.5㎜ ジョリパット塗装(ゆず肌)
天井	PB t=9.5㎜ ジョリパット塗装(ゆず肌)

ホール1・2・シアタースペース・テレビスペース・ディスプレイスペース1・2・寝室1・2・WIC・洗面室2

床	くるみ無垢フローリング
	t=15㎜ いろは塗装
壁	PB t=12.5㎜ ジョリパット塗装(ゆず肌)、
	PB t=12.5㎜、ラワンベニヤ
	t=5㎜ いろは塗装
天井	ラワンベニヤ t=9+5㎜ いろは塗装

浴室

床	300㎜角磁器質タイル t=9.0㎜
壁	300㎜角磁器質タイル t=10.5㎜
天井	フレキシブルボード t=6㎜ AEP

ロフト1・2

床・壁・	
天井	ラワンベニヤ t=5㎜ いろは塗装

全館アールデコ・スタイル

ホテルの格付けで、星いくつなどといわれるが、別に公的機関が決めたことではない。つまり、自称である。

このホテルも5つ星とうたっているのだが、それが適切な格付けになっているかどうかは見方による。パリにはすばらしいホテルがたくさん揃っているからなおのこと。

地下鉄の駅からはちょっと歩くが、エトワールの凱旋門にやや近いモンソー公園の前にこのホテルはある。ヒルトンであったせいか利用客はアメリカ人が多い。何年もかかってすっかり改装し、名前を変えた。アールデコ・スタイルのホテルともいっている。

478室。そのうちのテラス付きでエッフェル塔が見える部屋に投宿。

アールデコは、1925年に装飾美術博覧会がパリで催されたが、それ以来、あっという間に全世界を席巻したデザイン様式。パリ、ニューヨーク、ベルリン、フロリダ、上海、日本と各地で微妙に異なっているものの、その直前に流行したアールヌーボーの、植物的有機的な曲線の装飾とは異なり、機械化時代の装飾として、直線的なガタガタ模様とかストライプ、歯車や波や風の模様が繰り返され、コンパスで描かれたような同心円や幾何学的模様などが強いコントラストをもって表された。モボ、モガなどと呼ばれた風俗にも現れたり、その頃のミリタリズムと結びつけられたりもした。

発祥ともいえるパリでも特徴がある。人物や植物などをモチーフとしたものも極度に抽象化・図案化することなく、ちょっとアールヌーボーを引きずったような、比較的リアルな形象として使われたことが多かったのではないかと思われる。

朝のブーランジェリエ（パン屋）。

その伝でいえば、このホテル、パリ風アールデコを取り入れていて総じてとてもよくできている。ロビーや宴会場のホワイエなどのパブリック・スペースや、エグゼクティブ・ラウンジは床の石材などに白黒の三角形パターンが執拗に繰り返され、光沢のない金銀は抑えられ、ファブリックはストライプや大柄で、よく効果を上げている。しかもたくさんある額絵や装飾品、照明器具などは具象的な人物像などが使われている。

一般客室もうまく演出されていてバスルームなど機能と装飾のバランスがよく、古さも抑えられていて、パリ風を巧みに全館にちりばめようとしたデザイナーの努力が感じられる。

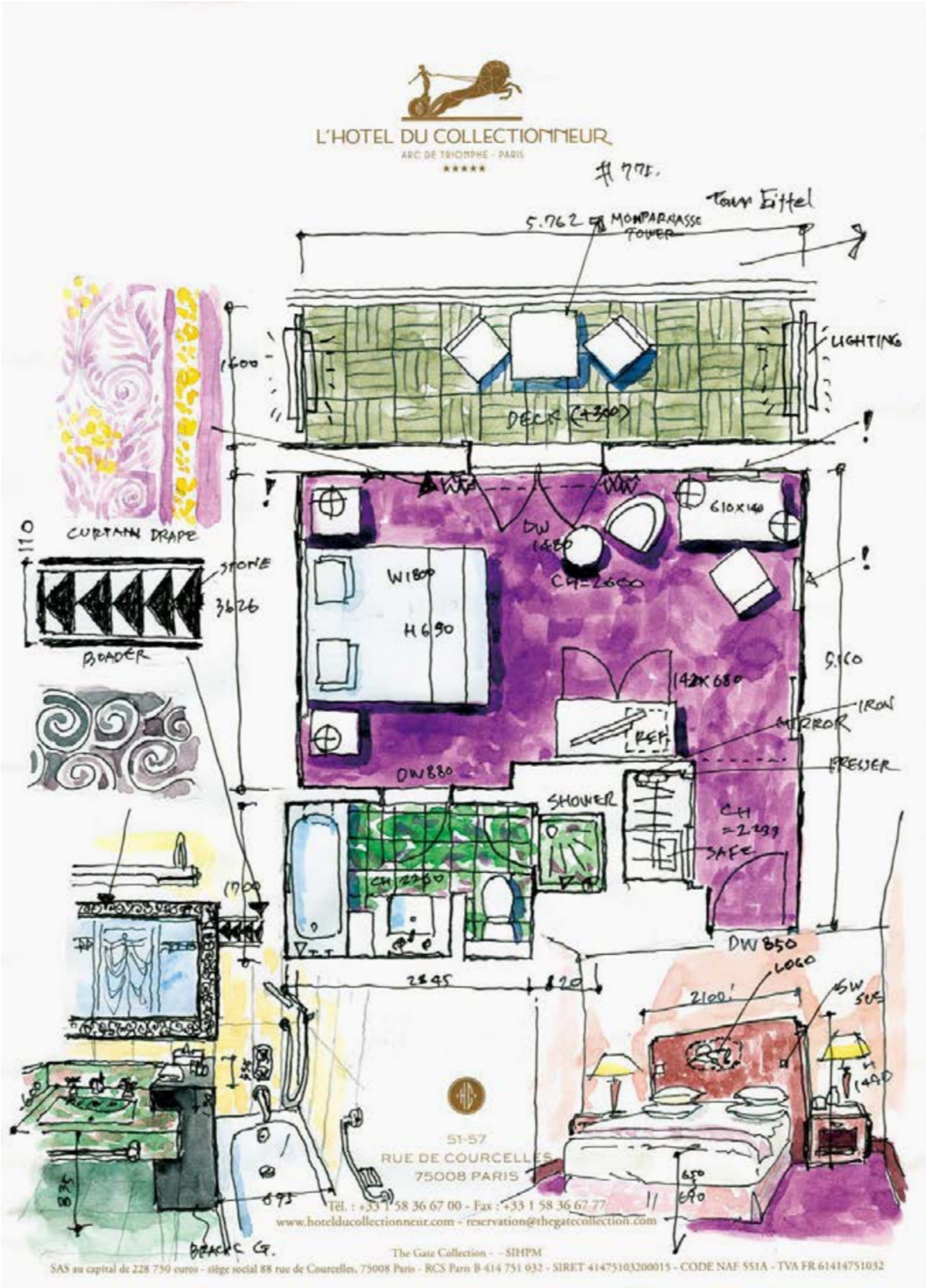
あの博覧会から90年たった。アールデコは、なおその輝きを失わず、ノスタルジックなイメージを与えつづけていて健在なのである。

マロニエの落ち葉を踏みしめながら買い物から帰ってくるとなにやら騒然としている。消防車が何台も来ていてホースを持った消防士が煙の中を走りまわり、エレベータが使えなくなり、防火戸がすべて閉じた。「うそー！」と言わせるほど真に迫っていたが、消防訓練のアラーム・テストであった。安全性のアピールには効果的。

数日後、市内で大規模なあのテロ事件が起きた。

石の洗面器まわりもアールデコ調。

うら・かずや／建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99～2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。北海道日建設計デザインアドバイザー。著書に『旅はゲストルーム』（東京書籍・光文社）、『測って描く旅』（彰国社）、『旅はゲストルームⅡ』（光文社）がある。



白黒紫を多用した色彩計画。

Text & Sketch by Ura Kazuya

L'HOTEL DU COLLECTIONNEUR	Add／51-57, rue de Courcelles
	75008 Paris-France
	Tel／+33 1 58 36 67 00
	URL／www.hotelducollectionneur.com

前衛表現の縁に立ち止まる

1

新宿ホワイトハウス　設計／磯崎 新

Isozaki Arata × Fujimori Terunobu

1／主室となるアトリエ部分は3間×3間の平面の上に3間の壁から立ち上がる完全立方体であった。磯崎は、コルビュジエの「シトロアン住宅」のアトリエを意識していた、と回想している。デビュー作から磯崎好みが発揮されているというしかない。

連載 現代住宅併走 第三十三回

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

写真／普後 均

2

外観

2／塀や入口もほぼ昔のまま。「青年芸術家の集団は大人気で、若い女性たちが群れて塀の上からアトリエ内を覗き、キャーキャー騒がしかった。そのなかに、湯川れい子さんも混じっていた」と赤瀬川さんの幼なじみが話していたらしい。2階右の窓がアトリエ上部、左が寝室の窓となる。寝室の下階には台所、風呂、トイレが納まる。

「磯崎新のデビュー作の新宿ホワイトハウスがまだ残っている」と赤瀬川原平さんから聞いたのはいつのことだったか。言われた辺りを探してみたが、新宿の変化は激しく、もう壊されたとしか思えなかった。磯崎さんに聞いても、「原平がそう書いているが、そもそも本当に自分が設計したのか記憶は定かでない」。にもかかわらず、なんの根拠によるのか、赤瀬川さんは「残っている」と言い続けた。

今から6年前の2010年10月末、事態は急変する。赤瀬川さんから電話が入り、「新宿ホワイトハウスの今の持ち主の宮田佳さんがイギリスから一時帰国し、連絡があった。一緒に見に行こう」。

新宿ホワイトハウスは、1957（昭和32）年、若き前衛芸術家の吉村益信のアトリエ兼住宅として建てられ、その後、画家の宮田晨哉氏に譲られた。今は姪の佳さんが所有し、知人が「カフェアリエ」として使っておられる。

赤瀬川さんと一緒に中に入ったとき、旧状がよく残っているのに驚き、ここで関係者の座談会を開いておく必要を感じ、『新建築』にお願いした。肝心の吉村さんは伊豆に引っ込んで久しく、はたして来てくれるのか当日まで不安だったが、病を押して来てくれ、充実した座談会となった。その2週間後、一人暮らしの吉村さんは伊豆で亡くなられた。

アトリエ

4／アトリエからロフトを見る。当初、ロフトは立ち上がり壁だけで、後に襖がはめられた。

座談のなかで吉村、赤瀬川の記憶に刺激され、磯崎さんは次第にその頃のことを思い出し、デビュー作であることを認めてくれた。原案を描いて渡し、細部までは見なかったとのこと。

座談で語られながら、建築から離れるからと『新建築』（2011年4月号）掲載の座談会記録から省かれた磯崎の回想を記しておこう。ネオ・ダダ（＊）展がここで開かれたときのこと、吉村が、割ったビール瓶を取り付けた細い通路をつくり、そのあいだを恐る恐る通り抜けた。こうしたハチャメ

4

Isozaki Arata × Fujimori Terunobu

アトリエ

3／ホワイトキューブのアトリエはロフトをもち、ロフトへは階段で上がる。階段とロフトとの接合の仕方は、とても大工の仕事とは思えず、磯崎のディテールではないかと推測する。

チャな表現に慣れた磯崎は、その後世界のどんな破壊的表現に接しても、驚くことはなかったという。

3人が次々に繰り出す昔話を聞きながら、建築の力を思った。空間が3人の記憶と想像力を刺激し、過ぎし日のシーンがいきいきと蘇ってくる。

新宿ホワイトハウスを根城に60年、ネオ・ダダが結成され、吉村、赤瀬川、篠原有司男、荒川修作などが前衛的表現運動を開始し、丹下健三研究室の大学院生だった磯崎も、夜になると新宿ホワイトハウスに入り浸っている。

ネオ・ダダ結成の中核となった吉村、赤瀬川、風倉匠は磯崎と同じく大分の出で、大分の旧制中学在学中から地元の画材店のキムラヤを借りて「新世紀群」なるグループを結成していたが、それをうながしたのは上京して東京大学に入ったばかりの先輩磯崎で、東京の芸術の新しい動きを後輩に伝え、「新世紀群」の名も磯崎がつけた。

大分のキムラヤの新世紀群から新宿ホワイトハウスのネオ・ダダへと、戦後を代表する前衛芸術運動の熱気は移ることになるが、細かく歴史をたどると、キムラヤと新宿ホワイトハウスの中間に国分寺の児島善三郎アトリエ時代がある。

上京した吉村が児島善三郎の旧アトリエを借りて住み、そこに赤瀬川も転がり込み、後に赤瀬川が小説に書くような〝新しい絵画表現を求めながらどうしていいかわからない〟鬱屈した日々を送っている。その後、吉村は新宿ホワイトハウスに移り、ためた鬱屈が一気に爆発してネオ・ダダとなった。

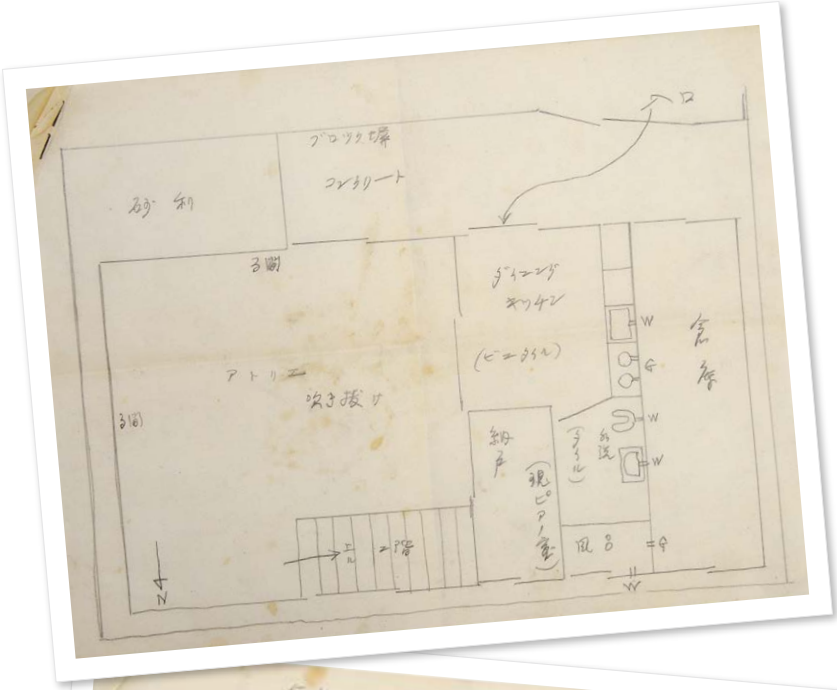
磯崎さんを旧児島アトリエの跡に案内したとき、私が、戦後の突発的前衛運動の代表として名高い福岡の「九州派」(57年本格的にスタート)を念頭に置いて、「大分派とでもいうべき動きがあり、大分、国分寺、新宿と移って爆発した、と考えてもいいんですか」と問うと、磯崎さんは「今から思うとそう言える」。

ネオ・ダダに行き着く大分派が〝建築家磯崎新の成立〟に与えた影響は一考に値する。

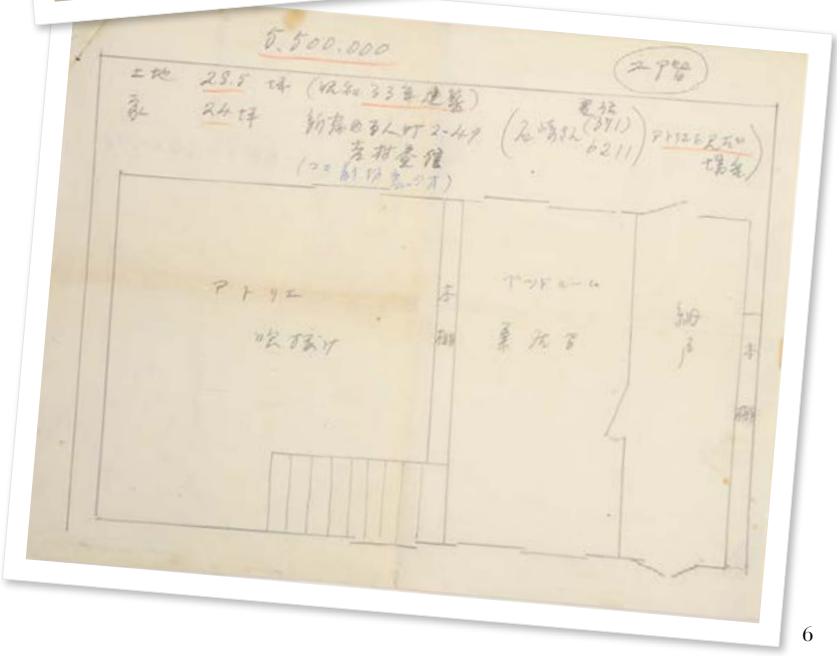
磯崎は大分中学時代、親友の赤瀬川隼(原平の兄)らと演劇部に所属して舞台を制作し、また絵を

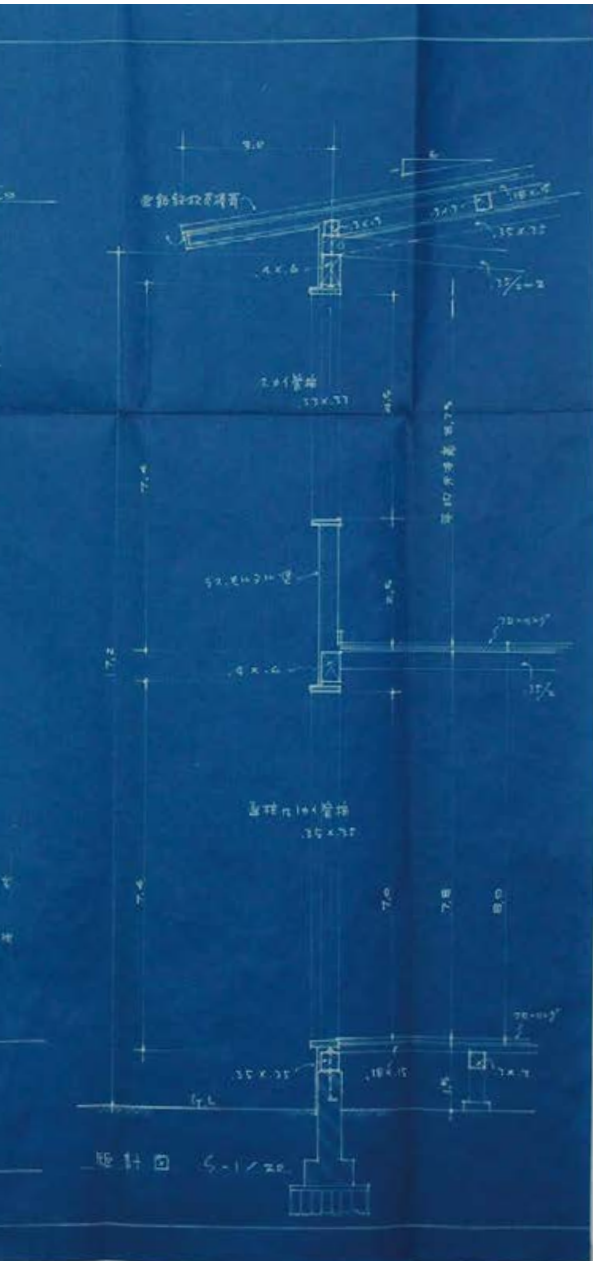
ダイニングキッチン

5／台所の流し台は、ステンレスの公団タイプ。公団用ではないが、初期の実例が残っているのはきわめて珍しい。



6





7

6／納戸の増築にあたり、吉村が描いたスケッチ。7／磯崎が吉村に描いて渡した図面は残されていないが、磯崎案に基づいてつくられた確認申請用の青図が伝わる。

描いていた。大学に入ってからも駒場時代（教養課程）はもっぱら絵を描き、先に見たように大分では「新世紀群」の先導役を果たした。その頃、磯崎本人は空襲、敗戦といった社会的体験と個人的体験から虚無を抱え込んでいた。

こうした来歴は、そのままネオ・ダダの芸術破壊的にして自己破滅的な表現活動に直結するはずなのに、なぜ飛び込まなかったのか。別の言い方をすれば、そうした虚無や破滅とその後の建築活動はどうつながるのか。

だいぶ昔、このあたりについて確かめておく必要を覚え、業界紙か何かの座談会にかこつけて赤瀬川さんに同行してもらい、磯崎邸に聞きに行ったことがある。答えは、次のように記憶している。

「ネオ・ダダを間近に見聞し、これでは建築は不可能だから、前衛表現からは一歩身を引いた。このことを自分は忘れてはいけないと思い、前衛運動を突き進んで自殺したフランスの建築家の版画を玄

水まわり

8／台所の奥に続くバス・トイレ室。

8

Shinjuku
White
House

新宿ホワイトハウス

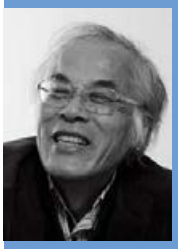
建築概要	
所在地	東京都新宿区
主要用途	住居+アトリエ
	(現在はカフェ)
設計	磯崎 新
施工	不明
敷地面積	約80.57㎡
建築面積	約44.69㎡
延床面積	約59.58㎡
階数	地上2階
構造	木造
竣工	1957年
図面提供	宮田 佳

Isozaki Arata

写真／木奥惠三

磯崎 新 (いそざき・あらた)

1931年、大分に生まれ、54年、東京大学工学部建築学科を卒業。サーリネン、丹下、カーン世代以後の世界のリーダーのひとりとして活躍し今に至る。建築とアートのあいだを行き来しながら設計し理論を組み立てる、という生き方を若き日から一貫して今日に至る。理論もデザインも時代とともにブレをみせ、一貫性に欠けるという見方もあるが、“廃墟感覚”“立方体好き”といった思想と造形の核心はブレない。

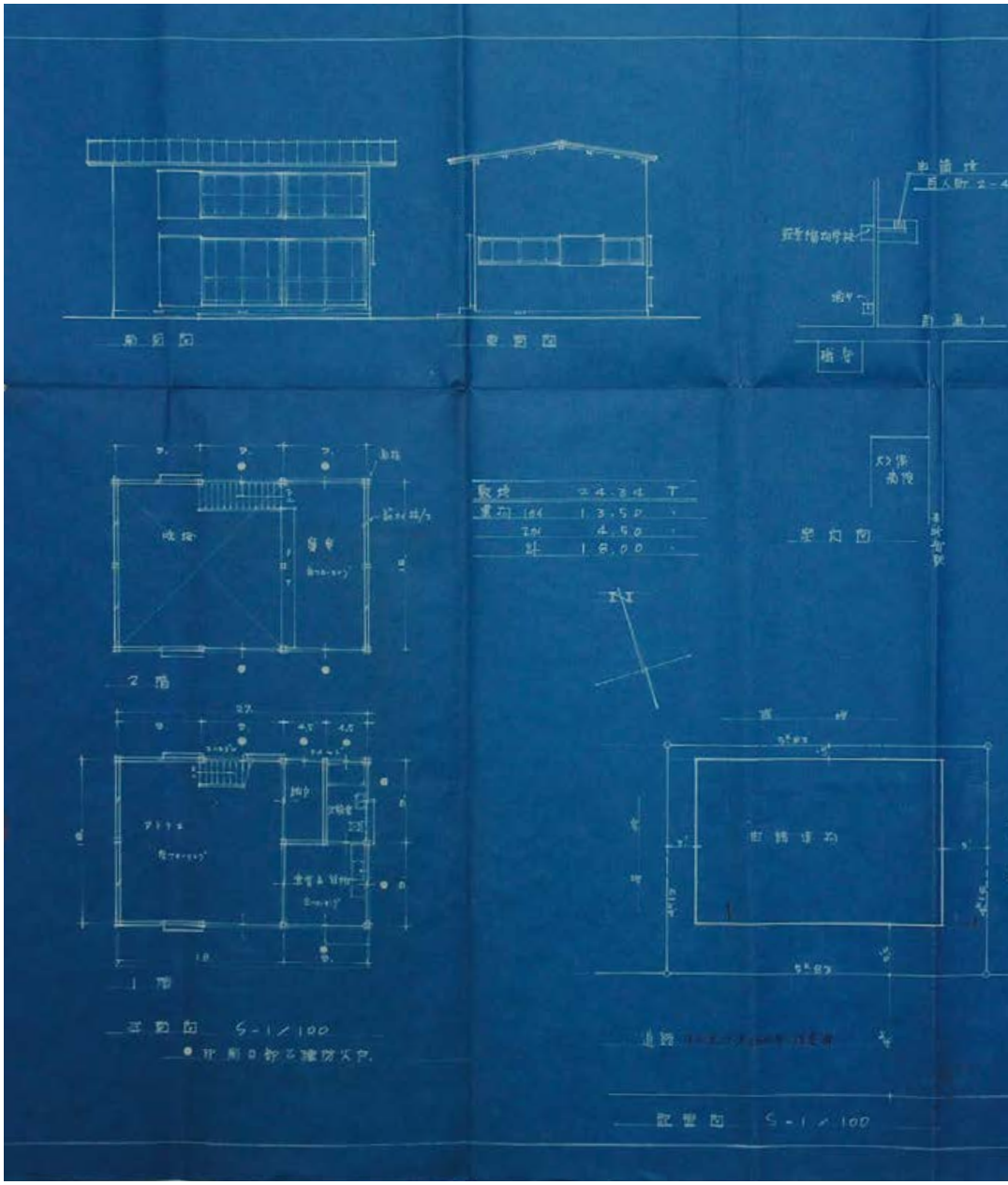


Fujimori Terunobu

藤森照信 (ふじもり・てるのぶ)

建築史家。建築家。東京大学名誉教授、工学院大学特任教授。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞＝『明治の東京計画』(岩波書店) で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険 東京篇』(筑摩書房) で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラ・ハウス)」(1997) で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000) で日本建築学会作品賞など。

平面図



現代住宅併走

Isozaki Arata × Fujimori Terunobu

関に掲げ、自戒とした」

仲間たちが前衛表現の道を突き進んだ果てに、断崖の縁から谷間に身を投ずるのを目撃しながら、自分は立ち止まった。そういう青年に挫折感が湧かなかったとは考えにくい。

この挫折を経て、建築家磯崎新が誕生したのではないか。前衛的表現と思想にはつねに寄り添う発言を重ねながら、実際につくる建築においては一定の距離を保ち、決して縁からは跳ばない磯崎新。縁で立ち止まるのは、建築家をほかの表現者と分かつ哀しい宿命というしかない。

この宿命への自覚をずっともちつづけたことが、戦後の建築界と文化全般のなかで磯崎を際立たせてきたのではないか。

＊ネオ・ダダ：「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」の略。1960年に、吉村益信、赤瀬川原平、荒川修作、篠原有司男、風倉匠らが、新宿ホワイトハウスを拠点に始めた前衛芸術運動。

お客さまと現場を大切に

代表取締役 山口元嗣 さん

九州八重洲の前身・九州八重洲興業は、1948年に東京で創業した八重洲興業の九州支店からスタートした。八重洲興業は、戦後の混乱期から戸建て分譲を手がけていた開発・分譲の草分け。その伝統を引き継ぐ九州八重洲興業の土地の開発力・情報力が評価され、西部ガスグループに入ったのは2008年のことだった。「住宅について、私はまだまだ素人なんです」と笑う九州八重洲社長の山口元嗣さんも、その際に西部ガスからやってきた。山口さん自身は「社員みんながんばってくれているから」と謙遜するが、社長就任以来、さまざまな改革を行って業績を回復させている。

年間に手がける棟数も範囲も限定する

山口さんの改革を一言で表すならば「量から質へ」の転換といえるだろう。「お客さま第一主義」や「現場第一主義」は、言葉にすると基本的なことに思えるが、徹底するにはまず社員の意識改革が必要になる。山口さんは、注文住宅の依頼に対して「調印式」「地鎮祭」「上棟式」「引渡し式」の4つを儀式化し、社長自ら参加する。いずれも家づくりのなかで大きな節目であるとともに、お客さまにとって人生の一大イベントだ。そこに社長を筆頭にスタッフや職人たちが参加して喜びを分かち合うことで、お客さまにとって忘れられない思い出となり、同時にスタッフ・職人たちを「本気」にさせる。

さらに、一軒一軒とじっくり向き合うため、九州八重洲では年間着工数に上限を定めている。現在は55棟。加えて、会社から60分以上かかる遠方での仕事はしない。

「職人たちに継続的に、しかも責任のある仕事をしてもらうには、これくらいの数が適正。距離は、メンテナンスでお客さまに迷惑をかける恐れがあるので、60分圏内としています」

そこには、将来を見据えた戦略があった。

2割受注が減っても揺るがない体制へ

「住宅の着工数が減っていくのは明らかです。だから右肩上がりの成長は目指さない。今より2割、戸建ての受注が減ってもやっていける体制をつくりたい」

九州八重洲のおもな事業は、戸建て分譲、宅地開発・販売、リノベーション・リフォーム、そして賃貸事業の4本柱。このうち戸建て分譲が売り上げの約8割を占める。山口さんは、少しずつでもリノベーション・リフォーム事業と賃貸事業の比率を高めていきたいという。とくにリフォームについては、すでに1800軒を超えるOB客があり、これを掘り起こさない手はない。

「言葉は悪いけど、いわば『売りっぱなし』だった」実態を見直し、社長就任後、すべてのOB客宅を社員総出で訪問。その後も定期的な訪問を続け、着実に信頼関係を取り戻しつつある。37人の社員うち7人も「家守り課」、つまりアフター担当として割り当てているのは、いかに会社としてアフターに力を入れているかを示

写真左／博多の都心部にあるミニ開発地の住宅群。写真右／リビング・ダイニング・キッチン。

写真提供：株式会社創実エージェンシー

Housing Company

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

Data

Kyushu Yaesu

九州八重洲㈱
●本社所在地
福岡県福岡市博多区東比恵1-5-5
●電話
092-472-2888
●代表取締役
山口元嗣
●会社設立
1948年
●従業員数
37人
●事業内容
住宅団地およびマンションの開発販売
住宅の設計、施工、販売
造成工事の設計、施工
ビル建築、不動産の
売買斡旋ならびに賃貸管理
●売上高
26億1,300万円（2015年3月期）
●URL
www.kyushu-yaesu.co.jp
●TOTO使用機器
・キッチン
CJ
・浴室
サザナSタイプ1616
・トイレ
ZJ
・洗面所
SQシリーズ

Yamaguchi Mototsugu

やまぐち・もとつぐ／1952年佐賀県生まれ。75年西南学院大学商学部経営学科卒業。同年、西部ガスに入社し、北九州支社営業部長、長崎支社総務部長などを歴任。08年九州八重洲興業の西部ガスグループ入りに伴い、同社社長に就任。「八重洲のじいじ」としてお客さまとの密接な関係を自らつくりつつ、同社の家づくりをけん引する。

取材・文／市川幹朗　写真／山下恒徳

している。

博多の中心から60分圏内はいわゆる都市部であり、すぐに行ける距離ではあるが、同時に条件のよい整形の土地が入手しにくい環境でもある。そこで九州八重洲が得意とするのが、写真のようなミニ開発。共用部やセットバックのルールを定め、一軒ではなくまとまって良好な住環境をつくり、それに共感した人に購入してもらう手法だ。デメリットを魅力に変えてしまう手法ともいえるだろう。「もちつもたれつ」の精神を共有して住まう人たちは、九州八重洲がスローガンとする「ふれあいの街づくり・住まいづくり」を体現し、10年後、20年後、やがて再び九州八重洲の大切なお客さまとなる。

小まわりのきく会社として信頼される存在であり続けたい。山口さんの方針は家余りが確実とされる将来に向けて、住宅会社のひとつの道筋を示している。

写真右／トイレと浴室。写真左／1階の天井を高くしたところが、2階ではロフトになっている。広い収納スペースにもなる。

Interview
with
Sato Katsuhito
and
Mikami Takayuki

戸建向けシステムバスルーム『サザナ』
プレミアムHGシリーズ、HSシリーズ新登場

快適と清潔を
きわめたら、
自在の空間が
生まれた。

日本初※1のユニットバスルームを開発したTOTOが、
先端技術でつねに時代にさきがけてきたシステムバスルーム。
好評のサンジュウマルアイテムに加え
画期的なクリーン機能を新搭載して、
ひときわ快適なスペースに生まれ変わりました。
技術者とデザイナーがタッグを組み、
「オンリーワン」のアイデアと技術によって清潔をきわめ、
掃除もしやすくした、かつてないクオリティ・バスルームの誕生です。
ゲストをお招きしたくなるほどの上質な空間。
『サザナ』担当の技術者とデザイナーがご紹介いたします。

取材・文／村上浩平　写真／山下恒徳

インタビュー

浴室事業部
浴室開発部
浴室商品開発グループ

三上貴之
Mikami Takayuki

インタビュー

デザイン本部
プロダクトデザイン部
第一デザイングループ

佐藤克仁
Sato Katsuhito

好評のサンジュウマルはそのままに

——ＴＯＴＯのシステムバスルームといえば、「ほっカラリ床」「エアイン®シャワー」「魔法びん浴槽®」（※２）のサンジュウマルアイテムが評判です。今回の『サザナ』シリーズのモデルチェンジにあたってもこれを採用しましたが、その理由についてお話しください。

三上貴之　「ほっカラリ床」は、いわばＴＯＴＯのお風呂の顔。タタミみたいなやわらかい踏み心地とぬくもり感、カラリと水がはけるクリーンさなどで高い評価をいただいています。「エアインシャワー」は従来比35％にもおよぶ節水性、「魔法びん浴槽」は数時間後もほとんど湯温が下がらない保温性（※３）が自慢です。

お客さまのご購入アンケートでも快適性が高く、そのうえ環境にも配慮したこの３つの機能が評価の上位にランクインしています。心地のよい入浴を多くの方々に味わっていただけるよう、『サザナ』の標準仕様として継続採用しています。

——そして今回は、新たにお掃除ラクラク機能が加わりましたね。

三上　これまでの浴室は、おもに今お話しした３つの機能で選ばれていたのですが、最近は「清掃性」に対するニーズも年々高まっているんです。汚れにくさとか、お掃除のしやすさですね。ＴＯＴＯのマーケティング調査でも、清潔に対する意識の高まりがより顕著になっています。そこで、２０１６年２月１日発売の新『サザナ』シリーズは「くつろぎのサンジュウマル」をベースとして、「クリーンでうれＣ（うれしい）お掃除ラクラク機能」を付け加えることにしました。

追随を許さない「４つのお掃除ラクラク機能」

——ではまず「お掃除ラクラク ほっカラリ床」はどう改良されたのですか。

三上　新「ほっカラリ床」は、基本的にはこれまでのＷ断熱構造を踏襲しています。したがってやわらかさ、ぬくもり感などはそのままですが、今回は表面に親水特殊処理を施しました。皮脂などの汚れが床に付着しても、汚れと床面のあいだに水がもぐりこんでくれます。そのため汚れが浮き上がって、従来よりも軽い力で、スッキリきれいにとれるのです。

——軽い力でとれるんですね？

三上　目地のように見える溝の部分も、ほら（やってみせる）、スッキリですよ。

——これは、びっくり（笑）。そして浴槽も新しくなりましたね。

三上　人大浴槽（人工大理石浴槽）の浴槽表面を、はっ水・はつ油成分を配合したアクリルウレタン系樹脂のクリア層で形成しています。それで汚れをはじくんです。浴槽の汚れはおもに皮脂などを含んだ湯あかや水あかなんですが、水あかも皮脂汚れも、ほら、みるみるうちにはじいていきます。

佐藤克仁　これまでの人大浴槽と比べても目に見える差があるでしょ。

——ほんとですね。さらに、水あかが簡単に落ちる鏡もできましたね。

三上　水あかはどうしてもついてしまいます。従来の鏡では、鏡と水あかの成分が化学的に結合してしまい、洗剤をつけてこすってもなかなか落ちませんでした。今回開発した「お掃除ラクラク 鏡」は、表面に炭素を成膜することで、ついた汚れが固着しないので、今までのようにゴシゴシ擦らなくても簡単に落ちるようになりました。極端な話、５年、10年とほったらかしにして固着した、頑固な水あかでも原理的にはとれるようになっています。

——ワイン用ペットボトルの内壁にも使われてるんですね。

三上　使われている炭素の膜はダイヤモンドライクカーボン（ＤＬＣ）といって、薄くても、ダイヤモンドなみに硬い素材なんです。ワイン用のペットボトルでは、容器内部への酸素の流入や、容器外部への水蒸気・炭酸ガスの流出を防ぐ技術として、採用されています。とても薄いので、像を反射するという機能を損なわず、鏡の表面と汚れのあいだに壁をつくることができます。ＤＬＣを大面積の鏡に採用するのは、国内初の試みです。

——４つめは「お掃除ラクラク カウンター」ですね。

佐藤　デザインのコンセプトは「清潔感」でした。水の流れを

New Product Story

Interview
with
Sato Katsuhito
and
Mikami Takayuki

point 3

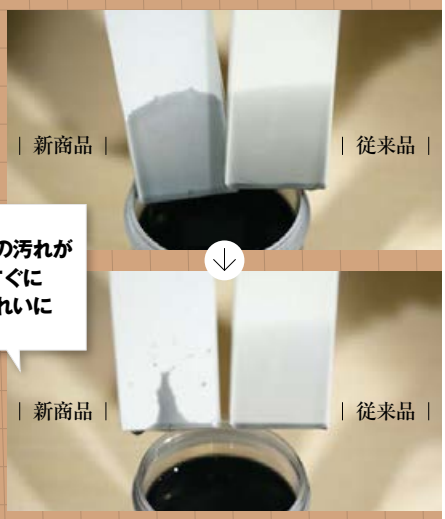
お掃除ラクラク カウンター

**浮島のように
壁から
離れたカウンター**

カウンターが浮いているので、壁とのあいだに汚れがたまらず、洗いやすい。

point 4

お掃除ラクラク 人大浴槽



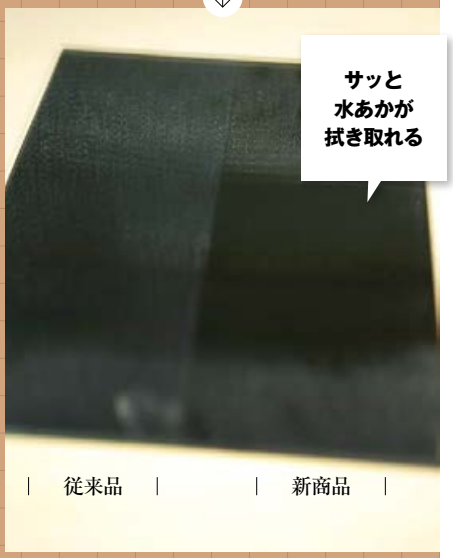
表面のクリア層にはっ水はつ油成分を配合することにより、スムーズに汚れが落ちる。

point 2

お掃除ラクラク 鏡

**付着した鏡の水あかを
きれいにできる
表面特殊処理**

水あかを付着させた鏡を中性洗剤で掃除。長いあいだ放置すると、鏡の水あかはとりにくくなってしまう。



炭素膜を施した新商品では、水あかがとれている（右側の拭いた部分）。炭素の膜により、鏡の表面の水酸基と水あかが結合しないため。

point 1

お掃除ラクラク ほっカラリ床

**従来からの
「ほっカラリ床」が
さらに進化**

床表面に、疑似汚れ（オレイン酸）をスポイトで垂らし、従来品と新商品の汚れの落ち具合を比較。

従来は表面に汚れが固着してしまうと汚れが落ちにくかった。

新商品では、床表面に特殊処理をした親水層の効果で、汚れと床のあいだに水が入り込み、よりスムーズに汚れがとれるように。

デザインすることで、同時に空気と光もまわっていく、明るく広い清潔な空間。そこで、影ができる部分を徹底的になくしていきました。

――壁や浴槽のつき合わせ部分にできる黒い線のような影ですね。

佐藤　これまでのカウンターは浴槽とくっついていました。しかしどんなにくっつけても、隙間がゼロということはありえないんですね。かならず小さな隙間ができる。ゼロにならないのなら、いっそのこと離してしまえと考えたんです。

――逆転の発想ですね。

三上　壁や浴槽から独立させたことで、水はけもよく、汚れがたまりにくくなりました。裏にも奥にも手がまわるので、お掃除がじつに簡単です。そしてもうひとつ、佐藤さん、言いたいことがあるでしょ（笑）。

佐藤　はい。つねにセットでデザインしなくてはならなかった浴槽や水栓、カウンターを、独自にデザインできるようになったわけです。極端ですが、これからはカウンターを丸くだってできる。ピンク色にだってできる。システムバスのデザインの自由度が一気に広がりました。

今までのシステムバスは、内寸を広げるというテーマを、外部にあった配管を浴槽やカウンター内部に通すことで実現してきました。TOTOがつくり出した、現在ではスタンダードな仕組みですが、内部を通すためにカウンターや浴槽などをつきあわせなければならず、パーツそれぞれのデザインに制約ができてしまいました。しかし今回は、配管を大幅にスリム化して再び外部へ移動。そのことによってデザインの自由さと、浴室内の広さを共存させることができたのです。TOTOがつくりあげてきた業界の常識をTOTOがもう一度見直すことで、新たな価値のある浴室ができたのではないかと思います。

機能も意匠も進化した「ほっカラリ床」

――TOTOの「ほっカラリ床」には、長年にわたる苦心と研究を経た、技術の粋がこめられていますね。

三上　2001年の初代「カラリ床」は、固いプラスチック素材でつくっていました。細かい直線に曲線を加えたパターンによって、水をじわじわゆっくり排水口に導くシステムです。翌日は靴下を履いたままでも、カラリと濡れない床を実現しました。

それ以前は、滑りにくさを主眼に凹凸のある床を開発していたのですが、凹凸があると水が残ってしまい、かえって滑りやすく、汚れもつきやすくなっていました。その排水の問題を改善したのです。結果、ちょっと変わった表面のデザインになりましたから、当時「カラリ床」はかなり話題になりました。

そして、その次の開発は2008年。細かい溝に汚れが残るというお客さまの声に応えて、パターンをタテヨコの直線基調にしてブラシでのお掃除をしやすくしました。

佐藤　デザインも、もっと自然の風合いを加えていこうということになったんです。床は大きい面積を占めるので、全体の印象を左右する重要な部材です。小さなマス目にそれぞれ表情の違う岩肌のようなデザインを施しました。

――そして2012年から「ほっカラリ床」になるわけですね。

三上　当時のTOTOの最上位グレードの『スプリノ』というシステムバスルームで採用していた「ソフトカラリ床」が、「やわらかい」うえに、断熱効果で「冷たくない」、グリッド効果で「滑りにくい」などと、想定以上にお客さまに好評でした。上位グレード商品用につくり込んでいたので、まったく同じものを『サザナ』に導入することはできなかったのですが、同じような機能を『サザナ』でも実現したいと考えていました。

「カラリ床」は剛性、導水性などの機能を一枚の床材でつくり出していたのですが、それらの役割を分散して、適材適所の材料を使うことにしました。表皮では「カラリ」性能、やわらかさと断熱を二重のクッション層、力がかかる下層の土台部分はスチール製の構造体にまかせ、それぞれコストパフォーマンス

Mikami Takayuki

みかみ・たかゆき／TOTO㈱浴室事業部浴室開発部浴室商品開発グループ。1983年埼玉県生まれ。2006年東京理科大学理工学部建築学科卒業後、TOTOバスクリエイト㈱入社。浴室開発部、浴室エンジニアリング企画部を経て、12年より現職。

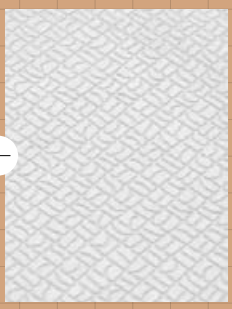
「ほっカラリ床」の変遷

機能ごとに層を分けたのが決め手

初代の「カラリ床」では一枚のプラスチック素材で乾きやすい床を実現。その後、断熱や意匠などの異なる機能を積層させる構成に変えることで開発がスムーズに。今では表面のデザインも14柄ある。

表面のデザインは14柄。

現在の「ほっカラリ床」



初代「カラリ床」

の高い部材を用いて、機能は向上させつつ総コストをおさえたんです。

――材料構成を増やしてコストを下げる。これも逆転の発想ですね。

佐藤　分散したことで、一番上の表皮の自由度が高まり、デザインの可能性が一気に広がりました。「ほっカラリ床」の基本構造、つまりレイヤー構造ができたことが、TOTOのバスルームの大きな分岐点になったのです。

――初代のカラリ床と比べると、デザインも大きく変わりましたね。

佐藤　特徴的な意匠の初代カラリ床は機能から生み出されましたが、カラリ性能を維持しつつデザイン性を高めるパターンの研究が進み、徐々にデザインが改良されました。2014モデルでは、「やわらかさ」を視覚的にも感じていただくためにグリッド一つひとつの表情を変え、さらに光の反射のしかたも変えました。

三上　角が立っているところがあったり、寝ているところがあったり。

佐藤　それでやわらかさを出しているんです。肌触りだけでなく視覚的なやわらかさも追求しているというわけです。そして、最新の「お掃除ラクラク ほっカラリ床」につながっていきます。

Sato Katsuhito

さとう・かつひと／TOTO㈱デザイン本部プロダクトデザイン部第一デザイングループデザイナー。1979年東京都生まれ。2002年多摩美術大学美術学部生産デザイン学科卒業後、食器メーカーを経て、05年TOTO㈱入社。以来、現職。

最初から一丸となってゴールへ

――佐藤さんも三上さんも同じ30代、今回の開発はスムーズにいきましたか。

三上　一方的にはならないし、助言を求めたらすぐ返ってくる。そういう意味ではバランスのいいチームだったと思います。

佐藤　最初の段階で、デザインのプロトタイプに開発者のみなさんの多くが同意してくれました。開発者もこれでいこうという気になってくれた。一丸となれたのは大きいです。設計が決まるまで、私は週の半分以上、事業部に出向きました(笑)。だから私は中の構造まで全部知っているし、逆に設計者もどうすればより美しい形状をつくり出せるのかという、デザイン部と同じ視点をもって考えてくれます。

三上　構造的にきびしかったら企画段階で却下されるのが普通ですが、デザインコンセプトの共有が早い段階で出来上がったことが、うまくいった原因かもしれませんね。

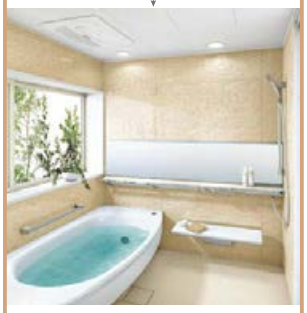
佐藤　同じ方向を向いて、それぞれがベストなアウトプットを出して、コラボできるところは一緒にやる。デザインも開発もお客さまの声を聞いて長年やっています。求められていることは同じ。そこがぶれないから、ゴールも一緒なんです。

※1／JIS規格による。
※2／『サザナ』標準仕様の「ほっカラリ床」「エアイン」「魔法びん浴槽」はTOTOの登録商標です。
※3／プレミアムHGシリーズ：5時間で温度低下2・5℃以内／HSシリーズ：4時間で温度低下2・5℃以内。（Nタイプは除く）

『サザナ』プレミアムHGシリーズ

type1

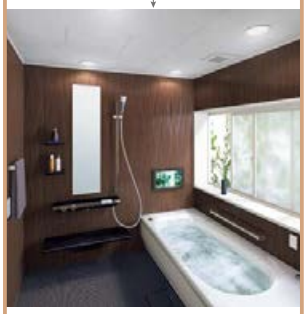
Aタイプ



1620（1.25坪タイプ）
HGV1620UAX1
1,560,000円～（税別／基本仕様）

type2

Wタイプ



1620（1.25坪タイプ）
HGV1620UWX1
1,460,000円～（税別／基本仕様）

カタログのご請求

くわしくは「戸建向けシステムバスルームサザナ」をご覧ください。カタログをご希望の方は、本誌に同封の「TOTO通信2016年春号アンケート用紙」にご記入のうえ、ファクスで、またはWEBにてお申し込みください。

FAX 093-571-0999

お問い合わせ

商品の技術的なご質問は、技術相談室ナビダイヤルまでお問い合わせください。

ナビダイヤル 0570-01-1010

三分一博志展

「風、水、太陽」

Hiroshi Sambuichi — Moving Materials

広島を拠点に瀬戸内を中心に設計活動を行う三分一博志氏。
「風、水、太陽」といった自然現象を「動く素材」ととらえ、
建築が“いかにして地球の一部になりうるか”を一貫したテーマとして設計を続けています。
本展では「宮島弥山展望台」「六甲枝垂れ」「直島ホール」「犬島精錬所美術館」など
瀬戸内のプロジェクトに焦点をあてて、三分一氏の探求する、
あるべき建築の姿を紹介いたします。

Project 2

写真＋スケッチ／三分一博志建築設計事務所

六甲枝垂れ

（兵庫県／2010年）

六甲の水の動き

Project 1

写真／新建築写真部

宮島弥山展望台

（広島県／2013年）

宮島の風と水と
太陽の動き
写真＋スケッチ／三分一博志
建築設計事務所

私と瀬戸内

文／三分一博志

私はいくつになっても地球から学ぶことが多いと感じています。

宮島弥山の原生林をリサーチしているときも、少年期の頃に遠足や登山で見ていたものや、感じていたことは今とあまり変わっていない、ということに気づきました。

厳島の社の配置やディテールは、天才的な先人の緻密な計算によって完成されているようにみえます。しかしそれは1000年の人と地球の関係のなかで、風、水、太陽といった「動く素材」によって洗練されつづけてきた姿かたちだということが理解できるようになってきました。

つまり、地球のディテールというものはつねに変化しつづけるものなのだと今は理解しています。

建築の真の価値はその時々の地球と人類文化の知的な関係を後世に伝えることだと、厳島のたたずまいが示してくれています。

そのような経験ができる場がいまだに残る瀬戸内に生まれ育ったことを、幸せに思っています。

「動く素材」風、水、太陽

本展覧会と書籍『三分一博志　瀬戸内の建築』（本誌63ページ参照）では、設計のプロセスにおける「動く素材」をテーマとしました。なぜなら、「動く素材」は地方において地球全体を考える軸となりうるからです。

かなり以前からTOTOギャラリー・間の展覧会の依頼を受けていましたが、私には建築の展覧会という形式に少し躊躇がありました。ただ、この展覧会が、とくにこれから建築家を目指す人たちや、建築家に限らず「動く素材」と真摯に向かい合っている地方の人たち、あるいはこれから故郷へ戻りたいと思う人たちへ、今の時代を生きる自分たちが何を後世へリレーすればいいのか、そのヒントや希望となるのであれば、意味があると感じています。それぞれの地域の「動く素材」こそ、それらを示し、導いてくれるものだと考えています。

私の設計の過程は、つねに「動く素材」への探究です。調べ、実験し、その結果から生じる仮説をもって再び現地に行き、最後は現地で実寸による実証を行うこともあります。何度も繰り返すため、非常に時間がかかりますが、この繰り返しによってその場所の「動く素材」に対する私のなかの認識と現実の動きが調整され、建築の姿かたちが整えられていきます。実際に「宮島弥山展望台」から「直島プラン 直島ホール／直島の家 またべえ」までの2年間、何も作品が完成していないことに気づきました。

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY・MA

次回予告

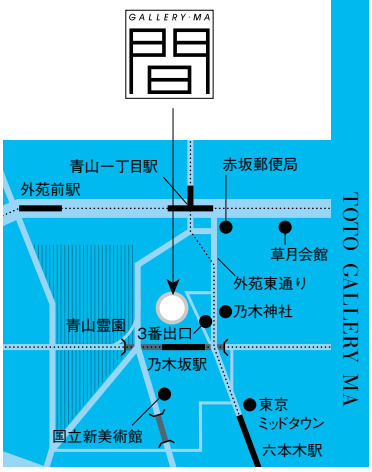
スミルハン・ラディック展
BESTIARY：寓話集

チリのサンティアゴを拠点に、樹脂膜や巨石などの素材を用いた、詩的かつ大胆な建築で注目を集めるスミルハン・ラディック氏。本展では職人の手による精巧な模型を中心に、「サーペンタイン・ギャラリー・パヴィリオン2014」をはじめとする多数のプロジェクトや、氏の思考の源を紹介します。

会期
7月8日（金）～9月10日（土）
講演会
7月8日（金）／イイノホール
＊事前申し込み制
詳細は5月中旬、
TOTOギャラリー・間
ウェブサイトにアップします。

TOTO
ギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03（3402）1010
ファクス／03（3423）4085
開館時間／11：00～18：00
休館日／月曜日・祝日、展示替え期間
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 7番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分



TOTO GALLERY MA

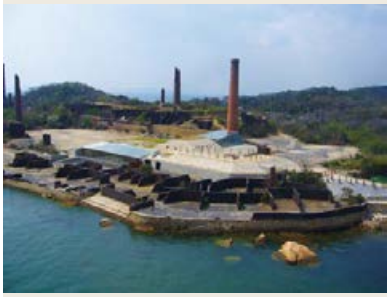
www.toto.co.jp/gallerma/

会期／2016年4月15日（金）～6月11日（土）

三分一博志（さんぶいち・ひろし）／1968年生まれ。東京理科大学理工学部建築学科卒業。小川晋一アトリエを経て、三分一博志建築設計事務所設立。2003年吉岡賞、10年JIA日本建築大賞、11年日本建築学会賞作品賞を受賞。代表作に「エアーハウス」（01年、山口県）、「犬島精錬所美術館」（08年、岡山県）、「六甲枝垂れ」（10年、兵庫県）、「宮島弥山展望台」（13年、広島県）、「直島ホール」（15年、香川県）など。現在、デンマーク王立芸術アカデミー建築学部教授（非常勤）。

Hiroshi Sambuichi

Project 4



写真＋スケッチ／三分一博志建築設計事務所

犬島精錬所美術館

（岡山県／2008年）

犬島の太陽と空気の動き

Project 3

写真＋スケッチ／三分一博志建築設計事務所

直島ホール

（香川県／2015年）

直島本村の風の流れ、水の流れ

私は「動く素材」を読み解く過程で、さまざまなデータや写真を記録として残してきました。今回の書籍では、陸だけでなく空や海から撮影しつづけてきた写真とスケッチを通して、私が何をみて何を調査しているのかを追体感していただけるように構成しています。

展覧会では、リサーチ、シミュレーション、風洞実験、実証の過程で用いたものや、そのときに制作したモックアップなどで、その場所の「動く素材」の探求の楽しさや、決して簡易ではないものの、それがいかに大切であるのかということを少しでもお伝えできればと思っています。

こうした過程は、すべてが創造的冒険です。その先に完成されていくものは、地球の一部となり、人にも地球にも認めていただけるものとなると信じています。それらは時代を超えてリレーし、変化しながら次の世代へのメッセージとなっていくものです。

地球のまなざし

地球の目はとてもきびしいです。永い年月、自然にさらされる建築の宿命において、「動く素材」をないがしろにし、彼を欺きつづけることは難しいでしょう。ただ一方で地球は、「動く素材」に丁寧な建築に対しては、さらに美しい形へと仕上げてくれます。「六甲枝垂れ」で、樹氷が白く美しく建築全体に着氷したとき、私はあらためてそのことを実感しました。

私がみてほしいのは建築そのものではなく、その先にみえてくる「動く素材」であり、それらが織りなす美しい地球のエナジースケープです。

ぜひこの展覧会や書籍をきっかけに瀬戸内を訪れ、「動く素材」を実際に感じていただきたいと願っています。

地球は私にとって師であり、永遠のパートナーなのです。

TOTOの最新情報

TOTO News 3

「TOTO水環境基金」国内外で活動する24団体への助成を決定

今回で第11回を迎える「TOTO水環境基金」。24団体に合計1,556万円の助成を行うことを決定しました。選考はTOTOグループ社員で行っており、国内では協働で活動を推進できるプロジェクトを優先的に、海外では社会的課題の解決に有効なプロジェクトを選びました。

TOTO水環境基金では、これまでに延べ204団体を助成しており、ボランティア参加や情報交換などを通じて、年々活動の輪が広がっています。

これからも「TOTO水環境基金」を通じ、市民団体を支援することで、水と暮らしの身近な課題解決に貢献していきます。

白子川源流・水辺の会と白子川の清掃活動

改革プロジェクトと深浜海岸の清掃活動

香月・黒川ほたるを守る会と河川敷の草刈り活動

www.toto.co.jp/company/environment/social/mizukikin/

TOTO News 1

TDY名古屋コラボレーションショールームが3月19日にオープンしました

TOTO、DAIKEN、YKK APの3社（以下、TDY）は、3月19日（土）に、「TDY名古屋コラボレーションショールーム」を名古屋駅前の大名古屋ビルヂングにオープンしました。水まわり・床・壁・天井・窓・エクステリアなど、リフォームや新築に必要な商品をワンストップでご覧いただける3社共同のショールームです。環境や健康、快適さに配慮したリフォームを体感できる空間展示のほか、各社の最新商品も多数展示しています。さらに4月には、TDY金沢、TY熊本もオープンを予定しています。

TOTO News 2

環境省「COOL CHOICE」に賛同しています

TOTOは、環境省が提案する温暖化対策「COOL CHOICE」に賛同表明しています。「COOL CHOICE」とは、消灯、温度設定、節水などの日常の行動に加え、車、家電、住宅など身のまわりのものを選ぶときにも、地球環境保全に貢献できるものを選択しようという活動です。読者のみなさまも買い物をする際、地球環境保全に役立つ賢い選択「COOL CHOICE」を実行してみませんか？　小さな活動の積み重ねが大きな力となり、地球環境を変えていく活動につながります。

COOL CHOICE

未来のために、いま選ぼう。

環境省 ウェブ：funtoshare.env.go.jp/coolchoice/
TOTO ウェブ：www.toto.co.jp/company/press/2015/11/24.htm

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

www.toto.co.jp/publishing

TOTO出版のお知らせ

Book 2

第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 日本館公式カタログ『en[縁]:アート・オブ・ネクサス』

世界的な建築の祭典、「第15回ヴェネチア・ビエンナーレ2016」の日本館の公式カタログ。誰もが共有できる未来が失われ、閉塞感が漂う現代において、建築や都市はどこへ向かおうとしているのか。20世紀の経済成長モデルではとらえられない次なる時代を生き延びるために、今までの社会のあり方、さまざまな関係性、つまりは「縁」を変えていくことに重点を置いた日本国内の若手建築家12組の作品にその答えの一端が見受けられる。個々の建築家が直面した課題に対する多様な戦いには、社会を変革していく可能性が秘められている。

- 編者／山名善之+菱川勢一+内野正樹+篠原雅武
- 定価／1,500円+税
- 体裁／210㎜×168㎜、並製、160ページ、和英併記
- 発行／2016年4月25日

Book 1

瀬戸内国際芸術祭2016「The Naoshima Plan 三分一博志」公式ブック『三分一博志 瀬戸内の建築』

風・水・太陽など地球上の「動く素材」と地形より導かれた建築。建築家・三分一博志が近年力を入れて取り組む瀬戸内での作品を紹介。土地のリサーチから設計・完成へと進む三分一博志独自の設計手法と実現までの取り組みを豊富な写真とスケッチ、図面などを交えて、その地のみずみずしい空気感を伝える構成でくわしく紹介。「宮島弥山展望台」「六甲枝垂れ」「犬島精錬所美術館」「直島ホール」「直島の家またべえ」「おりづるタワー」などを掲載。

- 著者／三分一博志
- 定価／2,600円+税
- 体裁／200㎜×200㎜、並製、304ページ、和英併記
- 発行／2016年3月18日

Present!

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

セラのお知らせ

究極まで薄く美しい洗面器「INO(イノ)」「VAL(バル)」新登場

「INO」AU16302／価格89,000円(税別)
「VAL」AU16280／価格65,000円(税別)

セラトレーディングでは、4月より新商品を発売いたします。なかでも注目は、スイス・ラウフェン社の新素材「サファイアケラミック」により実現した、究極まで薄く、しかも丈夫な洗面器「INO」と「VAL」シリーズです。陶器の素地には硬度の高いサファイアの鉱物質が配合され、強度を保った薄くデリケートなフォルムの洗面器が登場しました。ヨーロッパの水まわりに新風をもたらした薄く美しい洗面器を、ぜひご検討ください。

当商品を掲載した「CERA総合カタログ2016」のご請求は、セラトレーディングホームページ、またはファクスにてお申し込みください。
www.cera.co.jp　Fax:03-3402-7185

Information

『TOTO通信』定期購読をご希望の建築家をご紹介ください。

お申し込みはTOTO通信データ管理室まで → Tel / 093(513)6234　e-mail / toto_tsushin@jlink-net.com

＊法人あての送付となります。

Bookshop TOTO
Bookshop TOTO

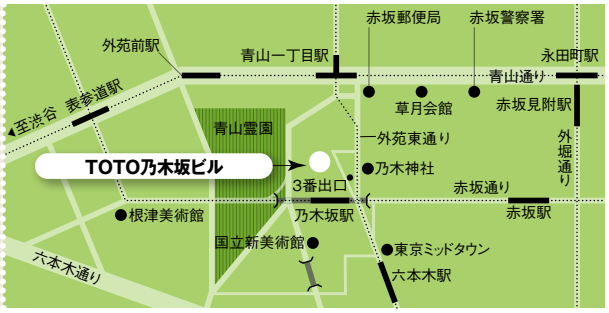
- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
- 電話／03(3402)1525
- 定休日／月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・日曜日・夏期休暇・年末年始

TOTO出版
TOTO Publishing

- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
- 電話／03(3402)7138
- ファクス／03(3402)7187
全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。

セラトレーディング
Cera Trading

- 所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル 1階・地下1階
- 電話／03(3402)7134
- ファクス／03(3796)6155
- 営業時間／10:00〜17:00
- 定休日／月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始



アクセス／●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2016年7月上旬発行の予定です。

TOTO通信 2016年 春号

TOTO通信 2016年 春号 第60巻・第2号 通巻510号
発行日:2016年4月1日 発行所:TOTO株式会社 メディア推進部
〒105-8305 東京都港区海岸1-2-20汐留ビルディング24F TEL.03(6836)2172

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

TOTO

くつろぎも、クリーンも、さらに進化。

商品についての技術的なお問い合わせ
TOTO技術相談室

TEL:0570-01-1010 受付時間:〈平日〉9:00～18:00〈土曜日〉9:00～17:00(日・祝・夏期休暇・年末年始を除く)
専門家コーナー「COM-ET」 www.com-et.com

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(513)6234 FAX.093(571)0999
＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。

8175